五所川原市埋蔵文化財調査報告書 第20集

原子溜池(4)遺跡・原子溜池(5)遺跡

送電線鉄塔建設事業に伴う遺跡発掘調査報告書

1997

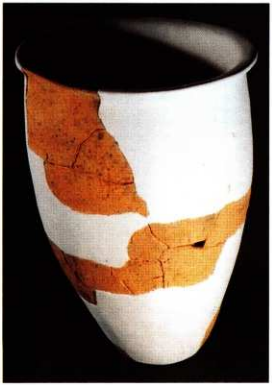
五所川原市教育委員会

五所川原市埋蔵文化財調査報告書 第20集

原子溜池(4)遺跡・原子溜池(5)遺跡

―― 送電線鉄塔建設事業に伴う遺跡発掘調査報告書 ――

五所川原市教育委員会



9号土坑出土

9号土坑出土

9号土坑出土

埋設土器遺構出土

序

津軽平野の中央部に位置する五所川原市には、観音林遺跡や前田野目の須恵器窯跡をはじめ数多くの埋蔵文化財が包蔵されています。

五所川原市教育委員会では東北電力株式会社による特別高圧送電線新五所川原線新設工事に伴い、工事予定地区内に所在する原子溜池(4)・(5)遺跡の記録保存を図るため、平成8年度に試掘調査、そして平成9年度に発掘調査を実施しました。

今回の調査により、縄文時代と平安時代の遺構や遺物が発見されました。

本報告書は、この発掘調査の成果をまとめたものであり、いささかでも今後の文化財の保護及び活用に資するところがあれば幸いに存じます。

最後に、本遺跡の発掘調査に御理解と御協力をいただきました東北電力株式会社と御指導、御協力を賜りました関係者各位に対しまして、厚くお礼申し上げます。

平成10年3月

五所川原市教育委員会

教育長　岩　見　貞　夫

例　言

1．この報告書は平成９年度に発掘調査をした五所川原市原子にある原子(4)遺跡と原子(5)遺跡の発掘調査報告書である。（平成８年度は、予備調査を実施）

2．原子溜池(4)遺跡、原子溜池(5)遺跡は、平成４年３月に青森県教育委員会が発行した「青森県遺跡地図」に遺跡番号０５０３９および０５０４０として登録されている。

3．土器の復元については、金木町文化財審議員・浅木全一氏に依頼した。

4．本報告書に掲載した、本遺跡の位置図は建設省国土地理院発行の５万分の１地形図「青森西部」を複写したものである。

5．挿図の縮尺は、図ごとにスケールを付した。

6．本文の執筆は調査員が担当し、各文末に執筆者の氏名を付した。

7．出土遺物・実測図・写真等は五所川原市歴史民俗資料館が一括して保管している。

8．発掘調査および報告書作成に当たり、青森県教育委員会文化課、青森県埋蔵文化財調査センター、森田村教育委員会・佐野忠史氏から御指導、御協力をいただいた。

目 次

口絵
序
例言
第1章 調査に至る経過と調査概要 …… 1
第1節 調査に至る経過 …… 1
第2節 調査要項 …… 1
第3節 調査の方法 …… 3
第4節 調査の経過 …… 3
第2章 遺跡周辺の地形と地質 …… 5
第1節 遺跡周辺の地形 …… 5
1 原子溜池(4)遺跡の位置と地形 …… 5
2 原子溜池(5)遺跡の位置と地形 …… 5
第2節 遺跡周辺の地質と上層 …… 7
1 遺跡周辺の地質 …… 7
2 原子溜池(4)遺跡の地質と上層 …… 7
3 原子溜池(5)遺跡の地質と上層 …… 7
第3章 原子溜池(4)遺跡の検出遺構と出土遺物 …… 9
第1節 検出遺構 …… 9
1 竪穴状遺構 …… 9
第2節 出土遺物 …… 9
1 土器 …… 9
第4章 原子溜池(5)遺跡の検出遺構と出土遺物 …… 12
第1節 検出遺構 …… 12
1 竪穴住居跡 …… 12
2 土坑 …… 17
3 石囲炉 …… 29
4 埋設土器遺構 …… 29
5 焼土集中遺構 …… 29
第2節 遺構外出土遺物 …… 31
1 土器・土製品 …… 31
2 石器・石製品 …… 31
第3節 検出遺構と出土遺物のまとめ …… 31
1 検出遺構 …… 31
2 出土遺物 …… 36
第5章 まとめ …… 37
引用・参考文献 …… 38
写真図版 …… 39
報告書抄録 …… 59

第１章　調査に至る経過と調査概要

第１節　調査に至る経過

平成８年４月、東北電力㈱より送電線鉄塔新設工事計画(事業名　特別高圧送電線新五所川原線新設工事)があるため遺跡所在地等の確認の打合せにくる。

県教育委員会と協議の結果、鉄塔予定地が周知の埋蔵文化財包蔵地にあたる箇所もあり、包蔵地以外についても遺跡存在の可能性もあることから、分布調査を実施することとした。

分布調査は平成８年７月９日～10日に実施し、県教委・市教委・東北電力同行で約30箇所の調査を行った。その結果９箇所の試掘調査が必要であることがわかった。

試掘調査は平成９年９月９日～10月30日の期間で実施された。その結果鉄塔番号30・31(原子地区)の２箇所については住居跡、カマド跡の遺構が確認され、遺物についても縄文土器、土師器、須恵器等が多数出土した。

以上のことから、鉄塔番号30・31(原子地区)については本調査(全面発掘)を実施し、埋蔵文化財の保護上記録保存を図る必要があり、平成９年度本調査を実施することになったものである。

第２節　調査要項

１	調査目的	特別高圧送電線新五所川原線新設工事の実施に先立ち、当該地区に所在する原子溜池(4)・(5)遺跡の発掘調査を行い、その記録保存を図り、地域社会の文化財の活用に資する。
２	発掘調査期間	平成９年４月30日から同年６月26日まで
３	遺跡名および所在地	原子溜池(4)遺跡（青森県遺跡番号０５００３９） 五所川原市大字原子字山元284－10、外 原子溜池(5)遺跡（青森県遺跡番号０５００４０） 五所川原市大字原子字紅葉96、外
４	調査面積	原子溜池(4)遺跡　196㎡ 原子溜池(5)遺跡　225㎡
５	調査委託者	東北電力株式会社
６	調査受託者	五所川原市教育委員会
７	発掘主体者	五所川原市教育委員会
８	主　　管	五所川原市教育委員会　生涯学習課 課　長　外崎武徳 課長補佐　柴谷和夫 係　長　荒谷初紀 主　査　三橋久美子

第1図　遺跡位置図

主　任　秋元　享

9 調 査 員

新谷雄蔵　日本考古学協会員
川村眞一　日本地学教育学会員
小山英治　五所川原市埋蔵文化財パトロール員
岩崎繁芳　北奥文化研究会員
清野真人　元車力中学校長
秋元四郎　北奥文化研究会員
桜庭健司　北奥文化研究会員

第3節　調査の方法

[原子溜池(4)遺跡]

調査区域は一辺14mの正方形であるため、グリット配置は南東部分の4区画をそれぞれ5m×5mにとり、その北側から西側にかけての周囲5区画を4m×5mを4区画、4m×4mを1区画とり、全体として9区画に分けグリット法で調査することとした。グリット番号は調査区域の南側から、かつ東から西へローマ数字Ⅰ～Ⅸまで付した。

レベル原点(ベンチマーク)は、GPS専用の衛星を用いて標高を測定し、調査区域の中心に設置した(67.4m)。

遺構の実測は基本的には遣り方で行った。遺物は、遺構および層位ごとにとりあげることを原則とし、遺物の出土地点、層位、標高を記録した。遺構外出土遺物は、層位及びグリットごとに取り上げた。記録保存のために適宜写真撮影を行った。遺構については土層断面・遺物の出土状況・完掘状況などを撮った。

[原子溜池(5)遺跡]

調査区域は一辺が15mの正方形となっているため、グリット配置は1辺5mの正方形の9グリットを設定し、南東隅から西側へ順にローマ数字でⅠ～Ⅸを付した。

レベル原点(ベンチマーク)は、GPS専用の衛星を用いて標高を測定し調査区域の中心に設置した(標高39.3m)。

遺構の実測、遺物の取り上げ、写真撮影は原子溜池(4)遺跡と同様に行った。

第4節　調査の経過

[原子溜池(4)遺跡]

6月17日、テント設営と同時に、刈払いを行いグリットを設定した。調査は14m×14mの正方形であるが、5m×5m、4m×5m、4m×4mの3種類グリットとし、それらの杭打ちを行った。北側のGⅦ、Ⅷ、Ⅸグリットから粗掘りにかかった。

翌18日から前日の作業を継続し、掘り下げを行う。須恵器片が出土する。これらのグリットでは、黒色土が薄く、まもなくベースが出はじめる。

掘り下げを東側のGⅠ、Ⅳ、V及び西側のGⅢ、Ⅵのグリットに移した。西側のGⅢ、Ⅵは北側のグリットと同様、早めにベースが出てしまった。GVには試掘調査で土坑または住居跡らしい遺構の存在が確認されていたので、Vグリットの掘り下げを慎重に行う。その結果23日には竪穴状遺構として概形を出すに至る。この竪穴状遺構はGⅠ、Ⅱ、Ⅳ、Vにまたがるもので、精査したところ南西隅斜面に、焼土及びカマドの煙道、底部に土坑と柱穴が出てきた。また、土師器も数点出土した。本調査区域で検出した唯一の遺構である。

全グリットの整理記録の後、6月26日埋め戻しとテントの撤去を行い、本遺跡の発掘を終了した。

[原子溜池(5)遺跡]

4月30日、遺跡の草刈と古木の取り去りを行い、15m×15mの調査区域を5m×5mのグリットを9グリットに区画し、杭打ちを行った。

5月6日から本格作業に入った。粗掘り、掘り下げの作業は排土の関係から東側のⅠ、Ⅳ、Vグリット、北側のⅦ、Ⅷ、Ⅸグリットから行った。破片であるが遺物が多い。縄文中期の土器が多く、土師器、須恵器も出土する。

5月9日、Ⅳ～Vグリットにかけて、昨年の試掘調査の盛土があり、その排土に取りかかり終了させる。掘り下げを進める中で松の根が障害になりはじめチェーンソーも使用しながら、グリットⅠ、V、Ⅶの抜根、切断を行う。

掘り下げが各グリットで本格化したため、グリットⅡに地質トレンチを掘り、調査員、作業員で層序を確認し合う。

Ⅰ、Ⅱ、Ⅳグリットに土坑、住居跡的遺構が出はじめる。Ⅱグリットの南側から、土師器の一個体近くの破片が出土する。焼土、地床炉が多いのが目立つ。

5月28日、Ⅲグリットの北東壁に住居壁が検出される。追跡の結果、掘込みの底に生活層が確認され全体像の把握に集中する。Ⅳグリット、Ⅶグリットの土坑が深く、掘り下げに難行する。

6月4日、Ⅸグリット北東隅に、直径約1m、深さ約1.6mに井戸状土坑を掘りあげる。またⅡグリットから土偶が出土する。

6月11日、Ⅲグリットの住居跡に2重の周構が見つかる。GⅦの大型土坑の整理に取りかかる。Ⅶグリットでは泥岩で囲った長径2.4mの長楕円形の炉が、北西部には埋甕炉が検出される。

全グリットの清掃、整理を行い記録を行って調査を終了する。6月12日から埋め戻し作業を行い6月16日全作業を終了した。

(川村眞一)

第２章　遺跡周辺の地形と地質

第１節　遺跡周辺の地形

原子溜池(4)遺跡・原子溜池(5)遺跡のある原子地域は、津軽半島の脊梁をなす中山山脈の南西端を占めている。この脊梁部の南端には馬ノ神山(549m)、梵珠山(468m)などの山稜があって、全体として馬ノ神山を中心にドーム状の構造をなしている。この馬ノ神山ドームを弧状に取り囲むように、外縁部に緩やかに南へ傾斜する大釈迦丘陵が解析の進んだ平頂な丘陵地として展開している。

大釈迦丘陵周縁部には前田野目台地が平行して分布している。前田野目台地は標高約20～110mで、面の高度、解析の程度、構成層などから高位、中位、低位の三つの段丘面に区分することができる。

高位段丘面は標高60～110mで長横溜池東方から原子溜池東方へと南東方向へ伸び、狼ノ長根公園一帯、中前田野目さらに浪岡町杉沢東方まで続いている。原子溜池(4)遺跡はこの面に立地している。等高線の間隔が粗く頂部に平野部への緩傾斜面が認められるが、侵食谷流域では谷壁が急峻となっている。前田野目層(薄く成層する軽石質砂・シルト・粘土等から成る)をおもな構成層とする。

中位段丘面は標高40～50mであり、等高線は平野にほぼ平行に走っている。この段丘面には原子溜池(5)遺跡が立地している。五所川原市野里から福山東方(面の勾配4／100)、原子、浪岡町花岡(面の勾配2／100)と分布している。構成するローム層は、洞爺火山灰を基底とする黄褐色ローム層である。

低位段丘面は標高20～40mであり、平野縁辺部に１～２kmの幅で分布している。五所川原市野里から豊成付近では標高20～25m、勾配1／100と平坦であり、浪岡町郷山前～吉野田付近では標高20～35mとやや高く、勾配2／100のところも認められる。低位段丘では碇ケ関浮石層(山口 1993)相当層直下に軽石質砂、細礫混じりの粗砂、固結粘土、腐植質粘土・シルト等が堆積している。

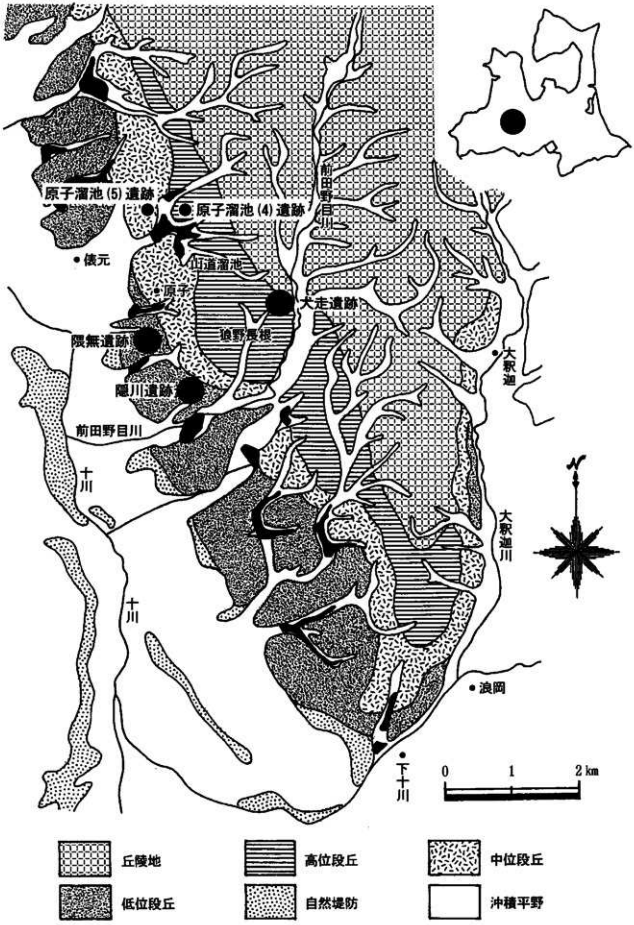
１　原子溜池(4)遺跡の位置と地形

原子溜池(4)遺跡は、五所川原市俵元から原子へ向かう、国道101号線原子入り口の信号を前田野目方向へ約500m進んだ八幡宮入り口から、北へ山道溜池堰堤を通り約１kmの舌状台地先端の頂上にある。

山道溜池と原子溜池群とに挟まれたこの舌状台地の先端は、山道溜池と原子溜池に接している。また、舌状台地は高位段丘に属するものである。遺跡は北東から南西に伸びる60m～70mの細長い平坦面上にある。

２　原子溜池(5)遺跡の位置と地形

原子溜池(5)遺跡は国道101号線の原子入り口の信号から北東約800m地点で、原子溜池北部の西側溜池岸一帯にある。溜池から西側は中位段丘となっており、西へ向けてゆるやかに傾斜し、その標高は25m～40mである。遺跡の標高は約39.3mである。なお、この段丘面はほとんどがりんご園となっている。



第2図　遺跡周辺地形区分図（1997 山口・川村）

第2節　遺跡周辺の地質と土層

1　遺跡周辺の地質

遺跡周辺地質の基盤をなすのは、遺跡北東の梵珠山である。梵珠山は第三紀中新世の長根層で構成されており、粗粒凝灰質砂岩、凝灰角礫岩および泥岩からなる。また、これらの層を流紋岩が貫いて前田野目川の上流に露出する。地質構造は梵珠山の長根層を基盤に南西ないし西へ傾斜する単斜構造である。基盤の上に順に中新世の地層である太田凝灰岩層、黒色頁岩の源八森層、シルト岩の不動滝層、軽石を含む白色砂質凝灰岩層の大滝沢層、鮮新世の、砂岩、シルト岩からなる大釈迦層が堆積し、さらに第四紀更新世の地層である軽石質凝灰岩の鶴ケ坂層、凝灰岩質砂、粘土、シルトおよび礫からなる前田野目層が重なって堆積している。前田野目層は両遺跡の基盤をなしており、多くの粘土を挟在するなど層相の変化が激しい。

2　原子溜池(4)遺跡の地質と土層

舌状をした台地(高位段丘)上にある遺跡の基盤は前田野目層で、下位は褐色凝灰質中砂でこの上位60～75㎝は赤褐色粘土となっている。この上位には暗褐色粘土質ローム、黄褐色細粒浮石層、さらに黒土層と重なっている。最上位は黄褐色細粒浮石と赤褐色粘土の混合した暗黄褐色の盛土となっている。この盛土は遺構を掘りあげたときの残土である。

3　原子溜池(5)遺跡の地質と土層

中位段丘上にある遺跡の基盤は、褐色凝灰質中砂、橙褐色粘土からなる前田野目層である。これらの上位には褐色粘土質ローム(上部には暗紫褐色をした二次的堆積層を含む)、黄褐色細粒火山灰層が重なり、暗黄色凝灰質黒色土(漸移層)を経て最上位の黒色土となる。

原子溜池(4)遺跡基本層序

Ⅰ層　10YR 2／2 黒色が強く、腐植に富み粘性は少なく孔隙が多い。

Ⅱ層　10YR 7／6 明黄色をした細粒の火山灰で、1㎝以下の軽石を含む。グリット1にのみみられる。

Ⅲ層　10YR 6／4 にぶい黄橙色で細粒の粘土質のロームである。軽石粒や石英、長石粒を多く含む。粘性が強く、締まりがある。風化面では締まりは弱く脆い。不規則な2㎜～3㎜の小塊に砕けやすい。

Ⅳ層　7.5YR 6／6 赤褐色をした粘土で粘性が強い。

Ⅴ層　10YR 4／6 淡褐色ないし褐色の凝灰質中砂で、やわらかく粉末状になりやすく脆い。

原子溜池(5)遺跡基本層序

Ⅰ層　10YR 2／2 黒色が強く、腐植に富み粘性は少なくさらさらしている。5㎜～1㎝の黄褐色シル

ト小塊が混入している。土器片も含む。

Ⅱ層　10YR 4／6 下位の黄褐色細粒火山灰と上位の黒色土の混合層である。黄褐色細粒火山灰の1㎜程度の粒子が多数含まれる。粘性は少なくやわらかい。この層の下位には径3㎝～10㎝の黄褐色細粒火山灰のブロックが混入しており、ブロックの周辺ほど明黄色化している。土器包含層である。

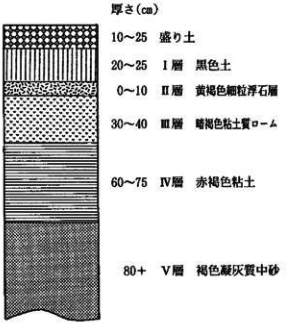
Ⅲ層　10YR 7／6 明黄色をした細粒の火山灰で、シルト質の部分もあり、この部分は締まりがよい。

Ⅳ層　10YR 6／4 にぶい黄橙色で粘土質のロームである。軽石粒や石英、長石粒を多く含む。粘性が強く、締まりがある。

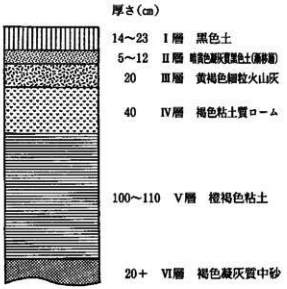
Ⅴ層　7.5YR 6／6 橙褐色をした粘土で粘性が強い。

Ⅵ層　10YR 4／6 凝灰質の褐色中砂で、部分的に酸化により、強い褐色を示すところがある。

（川村眞一）



第3図　原子溜池(4)遺跡基本層序



第4図　原子溜池(5)遺跡基本層序

第3章　原子溜池(4)遺跡の検出遺構と出土遺物

第1節　検出遺構

1．1号竪穴状遺構（第5・6図、写真1）

［位置］グリットⅠ、Ⅱ、Ⅳ、Ⅴの交点周辺に位置する。

［重複］なし

［平面形・規模］Ⅴグリットの東南隅に中心を持つ半径約2.4mの不整円形を呈する。

［壁・床］壁は緩やかに外反して立ち上がる。壁高は東壁で51.5cm、西壁で74.5cm、南壁で68.2cm、北壁で70.0cmである。床は凸凹はあるがほぼ平坦である。

［土坑］床面の北西隅にあり、平面形は長軸130cm、短軸110cmの楕円形を呈す。壁は緩やかに外反して立ち上がる。竪穴状遺構床面からの深さはほぼ30cmで底面は半径約30cmの不整円形である。

［ピット・柱穴］5個のピットが検出された。直径は25～30cm前後、深さは12～19cmである。5個のピットのうち、1個は土坑南側の底面に連続した斜面の一部にあり、ピットの深さは底面から19cmである。残りの4個は土坑東側半分を囲むように配置されており、その配置形は土坑西側から見ると台形を示している。

［かまど・煙道］南壁下部から床面にかけて位置する。火床面は長軸75cm、短軸65cmの楕円形を呈しており、かまどの天井部、袖部はないが、かまど跡と考えられる。煙道部は火床面南部から南壁斜面を通り、地表の煙出口となっている。斜面(壁面)に沿った煙道部の長さは1.3mである。幅(直径)は50cmであるが、その内部は幅25～30cm、長さ90cmにわたって燃焼を受け焼土となっている。

［堆積土］5層に分層された。下位から赤褐色ローム質粘土層、暗褐色粘土質ローム層、黄褐色細粒浮石層、黒色土となっている。赤褐色ローム質粘土層を掘り込んだ床面直上は暗褐色土層(厚さ5～7cm)で炭化物粒、焼土粒を含んでいる。

［出土遺物］床面から土師器片1個、かまどの火床面から煙道部にかけて土師器の2個体の各1／2に近い破片が出土した。また、床面に掘り込んでいる土坑底部から土師器片1個が出土している。堆積土から土師器片2個、縄文土器片1個が出土した。

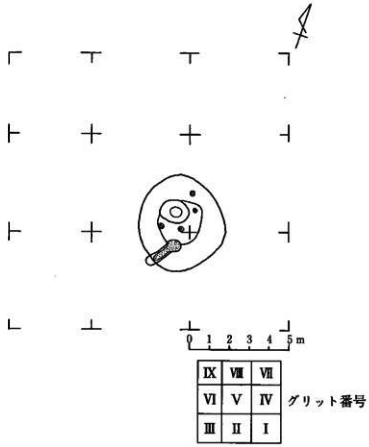
［小結］床面に造られている土坑は形態からロクロピットの可能性があり、カマド、煙道付きの本竪穴状遺構は焼物の工房跡の性格をもつものと考えられる。出土遺物から本遺構の時期は9～10世紀頃とおもわれる。

第2節　出土遺物

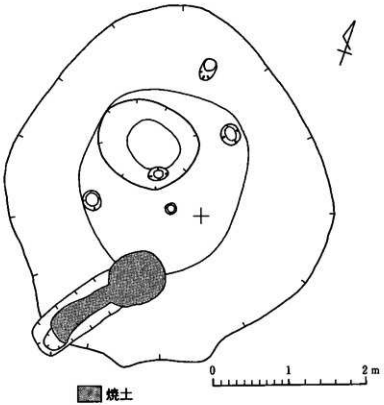
1　土　器（写真3）

本遺跡の全グリットからの出土遺物には、石器等はなく土器のみであった。土器のうち、最も多いのは土師器で約78%を占める。ついで須恵器で13%、縄文土器は9%である。

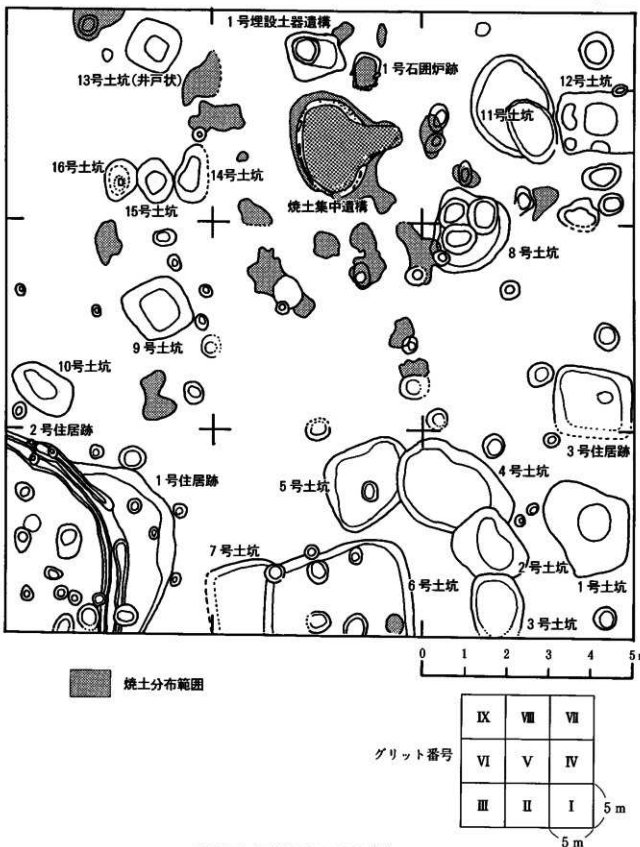
土師器のうち、遺構内出土の土器片は、甕と壺の破片である。それらの特徴は胎土が粗く、斜めの内面調



第５図　原子溜池(4)遺跡遺構配置図



第６図　原子溜池(4)遺跡１号竪穴状遺構



第7図　原子溜池(5)遺跡遺構配置図

整を施したあと、横ナデ調整がみられる。

遺構外出土の土師器の器種及び特徴も遺構内出土のものと同様である。

（新谷雄蔵）

第4章　原子溜池(5)遺跡の検出遺構と出土遺物

第1節　検出遺構

1　竪穴住居跡（第8・11・13図、表1・4・5、写真14・13）

(1) 第1号竪穴住居跡

[位置] Ⅲグリットに位置する。

[重複] 本住居跡は2号住居跡と重複し、本住居跡が古い。

[平面形・規模] 南北方向に長軸をもつ楕円形と思われるが、本住居跡は2号住居跡構築時の破壊により、残存部分は北東部分のみで、その平面形は弓型を呈している。

[壁・床] 壁高は東壁で28cm、南東壁で30cm、北壁で35cmで壁面は外反して立ち上がる。西及び南壁は破壊されて不明である。床面は薄い粘土質ロームとなっている。

[壁溝] 検出されなかった。

[ピット・柱穴] 遺構外縁に4個、内側に2個が検出された。外縁4個のうちの南東の1個は大きく、直径50cm、深さ20cmで、3個は直径25～30cm、深さは22～30cmである。遺構内部のものは直径25～30cm、深さは24cm及び9cmである。

[堆積土] 3層に分層できた。黒色土、黒褐色土を基調とし、下位はローム質粘土層となっている。

[出土遺物] 黒褐色土層から縄文時代の土器、石器、土師器が出土している。

出土遺物は下表のとおりである。

表1　第1号竪穴住居跡出土遺物

出土遺物	土器					石器		
	円筒下層式	円筒上層式	大木系	十腰内1式	土師器	石斧	石棒	スクレーパー
出土数	1	16	8	3	1	2	1	1

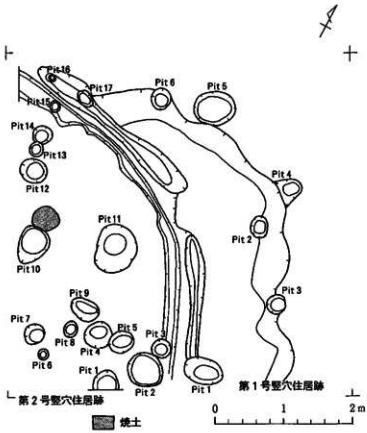
[小結] 本住居跡は出土土器の形式から、縄文時代前期末と考えられる。

(2) 第2号竪穴住居跡（第8・10・12・14-1・2図、表3・5・6、写真1・4・5・13）

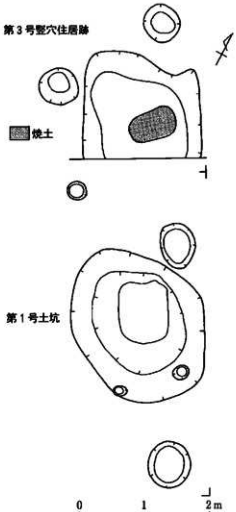
[位置] Ⅲグリットに位置する。

[重複] 1号住居跡と重複し、本住居跡が新しい。

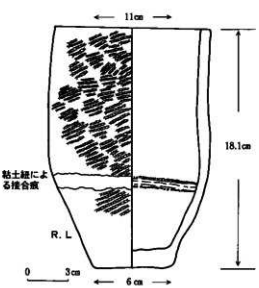
[平面形・規模] 長軸を北北西～南南東方向にもつ楕円形と推定されるが、下部がやや欠けた半楕円形を



第8図　第1号、第2号竪穴住居跡



第9図　第3号竪穴住居跡、第1号土坑



第10図　第2号竪穴住居跡出土土器

第11図
第1号竪穴住居跡
出土土器拓影図

第12図　第2号竪穴住居跡出土土器拓影図

表2　第2号竪穴住居跡出土土器観察表

番号	出土位置	器形	部位	外面施文文様
図-10	Ⅲ	深鉢	完形	縄文(RL)

呈している。長軸は6.5m、短軸は5.5mと推定される。

[壁] 東側はⅣ層の粘土質ロームを壁としており、本住居跡床面から1号住居跡床面までが壁高となっている。その高さはほぼ10～15cmである。北側はⅢ層、Ⅳ層を壁とし本住居跡独自の壁で、壁高は40～42cmである。

[床] Ⅳ層の粘土質ロームを掘り込み床面としている。

[壁溝] 壁に沿って2重に巡らされている。外側の溝は幅20～25cm、深さ12～23cmで内側のものより約10cm高い位置にある。内側の溝は、幅15～20cm、深さ15～25cmである。なお、外側の溝は東側約70cmの区間は溝の掘り込みは見られない。

[ピット・柱穴] 14個の柱穴及びピットを検出した。これらのうちピット2、8、9、10の4個は深さが60～83cmであり、柱穴と考えられる。他のピットの深さは3個が33～37cm、残りは12～23cmである。

[炉] 中心部から北東約1mのところに38cm×38cmの不整円形の焼土範囲が認められる。床面を掘り下げた痕跡はなく、地床炉と考えられる。焼土は厚さ60cmのレンズ状を呈している。

[堆積土] 3層に分層できた。暗黄褐色土及び淡褐色粘土質ロームを基調としており、炭化物粒を混入している。

[出土遺物] 縄文時代の土器・石器が出土している。土器は遺構北西部床面直上から、口縁部が欠失しているが、器形を保ったほぼ1個体の大木系土器が出土している。この土器は小型の深鉢で、R、Lの撚糸押圧文がみられ、ふくらみの内部には接合痕がみられる。外側は磨滅し燃焼跡が認められる。それ以外の土器は円筒土器及び大木系土器の破片での出土である。石器では石斧、石槍、スクレーパー、石皿が出土している。

出土状況は下表の通りである。

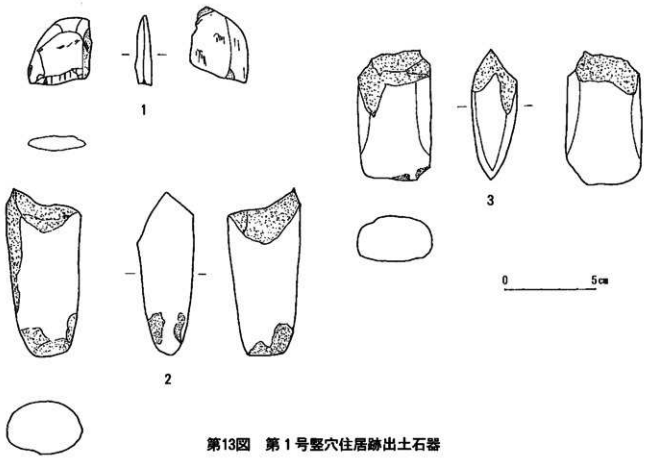
表3　第2号竪穴住居跡出土遺物

層	土器						石器				
	円筒下層式	円筒上層式	大木系	十腰内Ⅰ式	十腰内Ⅱ式	土師器	石槍	石斧	スクレーパー	赤鉄鉱	石皿
2層		81	53	9		8	3		1		1
3層	2	99	34	2	1			2	1	1	

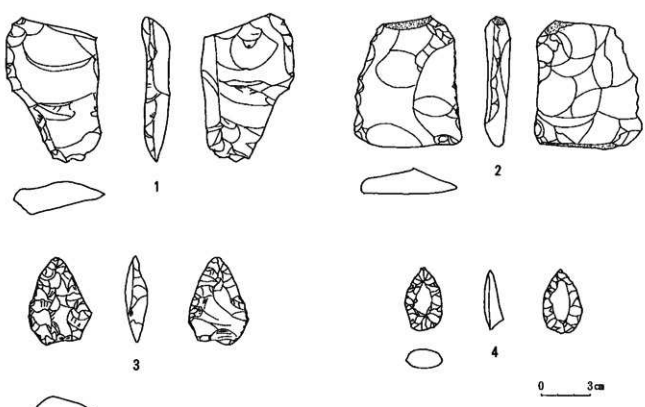
[小結] 本遺跡の時期は、出土土器の形式から縄文時代中期と考えられる。

表4　第1号住居跡ピット計測表

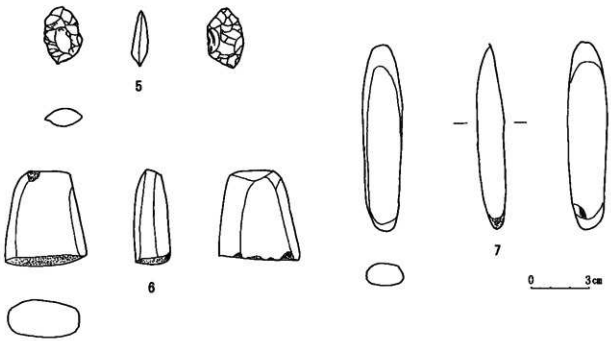
No.	形態	規模(cm)	深さ(cm)	No.	形態	規模(cm)	深さ(cm)
1	楕円	50×35	27	4	楕円	35×30	24
2	〃	30×25	24	5	〃	60×55	20
3	円形	35×35	23	6	円形	30×30	30



第13図　第１号竪穴住居跡出土石器



第14-１図　第２号竪穴住居跡出土石器



第14-2図　第2号竪穴住居跡出土石器

表5　第1号、2号竪穴住居跡出土石器計測表

図版番号	種別	形態最大測定値(cm)			質量	石質	グリット	層位	整理番号
		径	幅	器厚	(g)				
1号住 1	スクレーパー	4.35	3.18	0.87	13.51	玉髄	Ⅲ	Ⅰ	1444
〃 2	石斧	9.12	4.18	3.9	164.0	安山岩	〃	〃	1358
〃 3	石斧	7.6	4.6	2.4	129.8	ホルンフェルス	〃	〃	1449
2号住 1	スクレーパー	8.39	1.46	5.19	70.0	珪質頁岩	〃	Ⅱ	1607
〃 2	〃	7.04	6.54	1.58	80.0	〃	〃	Ⅰ	1725
〃 3	石槍	3.12	1.14	0.56	2.0	〃	〃	〃	1556
〃 4	〃	3.72	2.34	1.2	8.47	〃	〃	〃	1355
〃 5	小型石槍	7.09	3.55	2.03	3.0	〃	〃	〃	1457
〃 6	石斧	4.6	4.8	2.1	67.0	ホルンフェルス	〃	Ⅱ	1661
〃 7	〃	9.5	1.94	1.28	42.0	〃	〃	〃	1727
	石Ⅲ	14.8	4.1	4.5	600.0	角礫凝灰岩	〃	Ⅰ	1315
	石核	7.38	5.02	4.02	308.0	珪質頁岩	〃	Ⅰ	1298
	朱原料	3.56	1.45	4.04	20.2	赤鉄鉱	〃	Ⅱ	1661

表6　第2号住居跡ピット計測表

No.	形態	規模(cm)	深さ(cm)	No.	形態	規模(cm)	深さ(cm)
1	円形	40×40	14	10	円形	40×40	60
2	〃	50×50	83	11	〃	55×55	73
3	〃	30×30	18	12	〃	40×40	65
4	楕円	40×35	33	13	〃	20×20	16
5	〃	40×30	37	14	〃	30×30	12
6	円形	13×13	19	15	〃	15×15	16
7	〃	30×30	36	16	〃	15×15	19
8	楕円	25×20	21	17	楕円	30×17	32
9	〃	45×30	23				

(3) 第3号竪穴住居跡（第9図、写真1・6）

［位置］Ⅳグリット南東に位置する。

［重複］なし。

［平面形・規模］遺構の南側は未発掘のため推定であるが、南北辺及び東西辺約1.9m隅丸方形を呈している。

［壁］壁面は外反し、急傾斜で立ち上がる。壁高は北及び東側で約18cm、西側で約20cmである。

［床面］Ⅳ層の粘土質ロームを掘り込んで床面としており、堅くしまっている。

［柱穴・ピット］遺構内には検出されなかった。

［炉］中心部から北側にかけて幅40cm、長さ70cmにわたって焼土範囲が認められる。床面を掘り下げた痕跡はなく、地床炉と考えられる。焼土は中心部の厚さ約5cmである。

［堆積土］2層に区分される。暗褐色の粘土質ロームを基調としている。

［出土遺物］床面から円筒上層式土器片15片と大木系土器片3片が出土している。覆土からの出土は円筒上層式が64片、大木系13片、十腰内Ⅰ式2片、土師器4片である。

［小結］本遺構は規模は小さいが、地床炉とみられる焼土範囲が認められ、竪穴住居とみられる。遺構時期は出土土器形式から縄文時代中期末と考えられる。

2　土坑

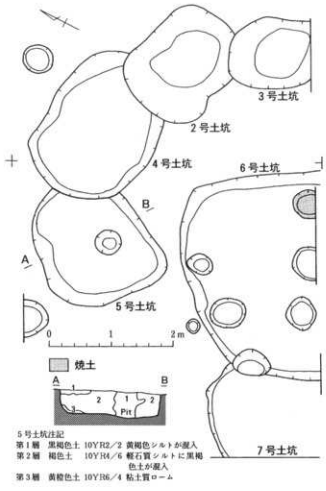
16基を検出した。重複している場合が多い。

(1) 1号土坑（第9・19図、表7・20、写真2・6・13）

［位置］グリットⅠ東側に位置する。

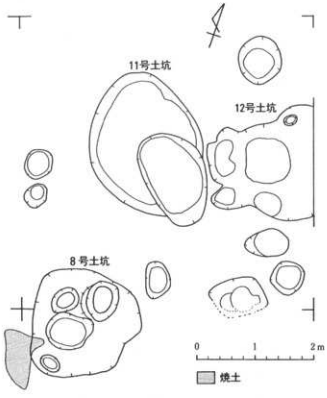
［形態］北東－南東方向に長軸をもつ楕円形を呈す。壁面は外傾して立ち上がるが、北側は急傾斜で南側は緩やかである。底面、壁面とも未調整で凹凸がある。底面は隅丸長方形を呈する。

［規模］長軸約2.5m、短軸約1.9m、深さ約0.43mを測る。底面では長軸約0.8m、短軸約0.7mである。



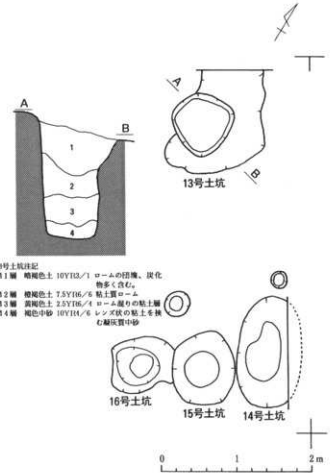
5号土坑注記
第1層　黒褐色土　10YR2/2　黄褐色シルトが混入
第2層　褐色土　10YR4/6 軽石質シルトに黒褐色土が混入
第3層　黄褐色土　10YR6/4 粘土質ローム

第15図　第2号～第7号土坑



第17図　第8号、11号、12号土坑

第16図　第9号、第10号土坑



13号土坑注記
第1層　暗褐色土　10YR3/1 ロームの粒塊、炭化物多く含む。
第2層　褐色土　7.5YR6/6 粘土質ローム
第3層　黄褐色土　2.5YR6/4 ローム層上の粘土層
第4層　褐色中砂　10YR4/6 レンズ状の粘土を挟む凝灰質中砂

第18図　第13号、14号、15号、16号土坑

[覆土] 覆土は2層に区分される。1層は暗黄褐色土でローム混じりで締まりがある。2層は褐色粘土質ロームで締まり、粘性とも大きい。

[出土遺物] 縄文時代の土器、石器と土師器が出土している。土器は破片での出土である。遺物の出土状況は下表の通りである。

表7　第1号土坑出土遺物

土器・石器 ＼ 覆土	土器				石器		備考
	円筒上層式	大木系	十腰内Ⅰ式	土師器	石斧	石錐	
1層	27	8	1	3			
2層	29	7			1	1	床面直上の層

[時期] 出土している土器形式から縄文時代中期と考えられる。

(2) 2号土坑（第15・20図、表8・20、写真2・6・14）

[位置] グリットⅠの中心よりやや南西に位置する。

[形態] 平面形は長辺を北東－南東方向にもつ隅丸の長方形を呈す。壁面は緩やかに外傾しているが、南側では急傾斜して立ち上がる。底面も平面形と同様の形を呈す。底面、壁面ともに凹凸がある。

[規模] 長辺約1.7m、短辺約1.4m、深さ約0.6mを測る。

[覆土] 覆土は2層に区分される。1層は暗黄褐色土で黄褐色のローム塊、粘土質ロームが混じり、締まり、粘性がある。2層は褐色粘土質ロームで、締まり、粘性とも大きい。

[出土遺物] 出土遺物は土器の破片のみで下表のとおりである。

表8　第2号土坑出土遺物

土器・石器 ＼ 覆土	土器				石器
	円筒上層式	大木系	十腰内Ⅰ式	土師器	スクレーパー
1層	23	3	2	1	1
2層	4				

[時期] 出土土器の形式から縄文時代中期と考えられる。

(3) 3号土坑（第15図、写真2）

[位置] グリットⅠの南壁中心よりやや西側に位置する。

[形態] 平面形は長辺を南北にもつ隅丸の長方形を呈す。東西断面はやや開いたU字型を示すが南北断面の北側には浅い平坦な棚状部がみられる。壁面はやや垂直に立ち上がる。南側の壁面は未発掘でベルトと接する。

[規模] 長辺約1.5m、短辺約1.2m、深さ約0.39mを測る。

[覆土] 2層に区分される。1層は暗黄褐色凝灰質黒色土、2層は粘土質ローム混じりの暗黄褐色土である。

[出土遺物] 床面直上から円筒上層式土器片5片、大木系土器片1片が出土している。

[遺構時期] 出土土器から縄文時代中期末と考えられる。

(4) 4号土坑 (第15・21・22図、表9・20、写真6・12・14)

[位置] グリットⅠの北西部とグリットⅡの北東部にかけて位置する。

[形態] やや東西方向に長軸をもつ長楕円形を呈する。東側は2号土坑に、西側は5号土坑によって切られている。壁面は急傾斜で外傾して立ち上がる。底部、壁面とも凹凸がある。

[覆土] 2層に区分される。1層は暗黄褐色土で黄褐色のローム塊、粘土質ロームで、締まり粘性ともに大きい。

[出土遺物] 出土遺物は破片のみで下表のとおりである。

表9 第4号土坑出土遺物

土器・石器 / 覆土	土器					石器
	円筒下層式	円筒上層式	大木系	十腰内Ⅰ式	土師器	スクレーパー
1層	1	37	7	3	1	1
2層		7				

[時期] 出土土器の型式から縄文時代中期と考えられる。

(5) 5号土坑 (第15・23・24図、表10・20、写真6・7・14)

[位置] グリットⅡの北部に位置する。

[形態] 平面形は南北に長軸をもつ楕円形を呈する。断面形は凹形を示す。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。壁面、底面とも凹凸がある。

[規模] 長軸約2.1m、短軸約1.8m、深さ約0.4mを測る。

[覆土] 2層に区分される。1層は黒褐色土層で粘性は少ない。2層は粘土質ローム混じりの暗黄褐色土である。

[出土遺物] 出土遺物は下表のとおりである。

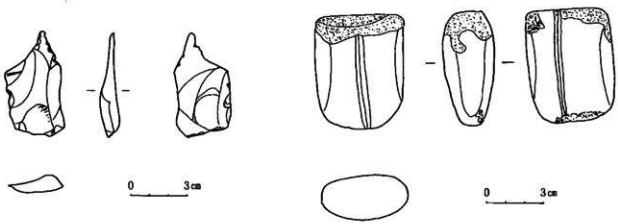
表10 第5号土坑出土遺物

土器・石器 / 覆土	土器				石器
	円筒下層式	円筒上層式	大木系	須恵器	石鏃未製品
1層	1	22	5	6	1
2層	1	3	2		

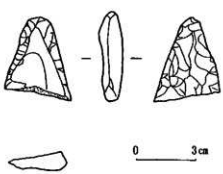
[遺構の時期] 出土状況及び出土土器の型式から縄文時代前期末から中期と思われる。

(6) 6号土坑 (第15・25図、表11・20、写真7・8・12・14)

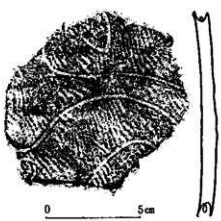
[位置] グリットⅡの南東部に位置する。



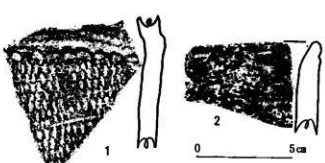
第19図　第１号土坑出土石器

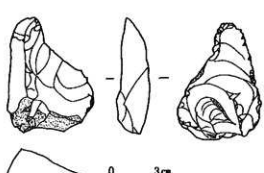


第20図　第２号土坑出土石器

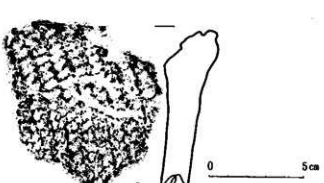


第21図　第４号土坑出土土器

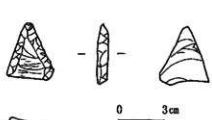




第22図　第４号土坑出土石器



第23図　第５号土坑出土土器



第24図　第５号土坑出土石器

[形態] 平面形は南西部は7号土坑によって切られ、南側は調査区域外となるため、明確ではないが北東から南西方向へ長辺をもつ隅丸の長方形を呈する。壁面は緩やかに外傾して立ち上がる。壁面及び底面とも凹凸がある。土坑内部には北側と南側にそれぞれ2個のピットがあり、また南東隅に半径22cmの半円形(未発掘のため)焼土集合域がみられる。

[規模] 長辺約3m、短辺約2m、深さ約0.2mを測る。

[覆土] 2層に区分される。黄褐色シルト質火山灰ブロックを含む暗褐色土層と粘土質ローム層である。

[出土遺物] 出土遺物は下表のとおりである。

表11 第6号土坑出土遺物

土器・石器 / 覆土	土器					石器
	円筒下層式	円筒上層式	大木系	十腰内I式	土師器	鉈状石器
1層	4	38	12	3	2	
2層		10	3	2		1

[遺構時期] 出土状況及び出土土器の型式から縄文時代中期から後期と考えられる。

(7) 7号土坑 (第15図)

[位置] Ⅱグリット南西隅に位置する。

[形態] 遺構の南側及び西側は未発掘であるが平面形は北西から南東に長いほぼ隅丸の長方形を呈する。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。壁面、底面とも凹凸を示し、断面形は深い箱型を呈す。

[規模] 長辺約1.8m、短辺約1.2m、深さ約0.9mを測る。

[覆土] 2層に区分される。黄褐色シルト質火山灰ブロックを含む暗褐色土層と褐色粘土質ロームである。

[出土遺物] 下位の2層から縄文土器の円筒下層式土器片1片(b式)、円筒上層式土器片1片、大木系土器片1片が出土した。また、上位の1層からは円筒上層式土器片3片が出土している。

[遺構の時期] 出土土器の型式から縄文時代中期と考えられる。

(8) 8号土坑 (第17図、表12)

[位置] Ⅳグリット北西部からⅦグリット南西部に位置する。

[形態] 平面形は半径約0.9mの不整円形を呈す。断面形は深ナベ型をしており、底部には大型のピットが3個あり、南に1個、北に2個並んで三ツ目状になっている。土坑南西の落ち込み部に、小範囲に焼土がみられる。これは、本土坑外西側に50cm×100cmの範囲で分布する焼土範囲の一部である。

[規模] 半径約0.9m、底部までの深さ約1.1mである。ピットは南側のものは長軸0.8m、短軸0.6mの楕円形で、深さ0.42mを測る。東側のものは、長軸0.6m、短軸0.5m、深さ0.18mを測る。西側のピットは長軸0.5m、短軸0.3m、深さ0.25mを測る。

[覆土] 3層に区分できる。1層はシルト質火山灰混じりの暗褐色土で中に多量の灰、炭、焼土粒を含む。2層は粘土質ローム層と1層の混合層で木炭、焼土粒を含む。3層は橙褐色粘土である。

[出土遺物] 縄文土器の破片のみの出土である。出土状況は下表のとおりである。

表12　第８号土坑出土土器

覆土＼土器	円筒上層式	大木系
1　層	10	6
2　層	7	8
3　層	4	2

［時期］出土した土器型式から縄文時代中期と考えられる。

(9) ９号土坑（第16･26図、表14）

［位置］Ⅵグリット中央よりやや北東に位置する。

［形態］平面形は辺を東西及び南北にもって隅丸方形を呈す。断面形は深い皿型で、壁面は緩やかに外傾して立ち上がる。底面にはやや北側よりの３ヶ所で焼土がみられる。

［規模］方形の一辺は約1.5m、深さ約0.2mを測る。焼土範囲は３ヶ所とも30cm×20cm、中心の厚さ３cm以下である。

［覆土］暗褐色土の単一層である。

［出土遺物］不完全ながら須恵器の細口長頸壺１個体、甕形土師器２個体の破片が出土した。いずれも復元している。

［時期］出土した土器型式から10世紀頃と考えられる。

(10) 10号土坑（第16･27図、表13、写真８）

［位置］Ⅵグリット南西隅に位置する。

［形態］平面形はほぼ東西に長軸をもつ、楕円形である。壁面は急傾斜で外傾して立ち上がるが、南壁は緩傾斜で立ち上がる。南壁の緩い斜面にはピットが２個みられる。底面は東側に膨んだ楕円形を呈する。

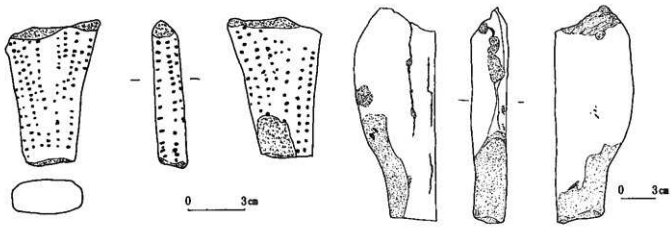
［規模］長軸1.5m、短軸1.1m、深さ約0.8mを測る。なお、２個のピットはともに直径約0.2m、深さ約0.12mである。

［覆土］２層に区分できる。１層は暗褐色土、２層は褐色粘土質火山灰である。

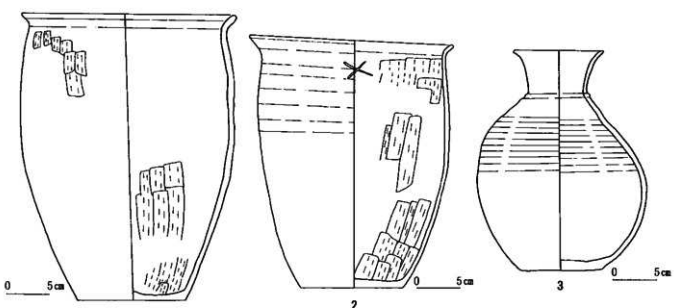
［出土遺物］破片のみの出土である。遺物の出土状況は下表のとおりである。

表13　第10号土坑出土土器

覆土＼土器	円筒上層式	大木系	十腰内Ⅰ式	土師器
1　層	5	2	1	1
2　層		2		



第25図　第６号土坑出土土偶・石器



第26図　第９号土坑出土土器

表14　第９号土坑出土土器観察表

遺物番号	種類	器種	出土位置	計測値			外面調整			内面調整			底面調整	備考
				口径	器高	底径	口縁部	体部上半	体部下半	口縁部	体部上半	体部下半		
1	土師器	甕	G-6 9号土坑	24.9	33.3	12.7	ヨコナデ	ヘラケズリ	ヘラケズリ	ヨコナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	砂底	
2	〃	〃	〃	23.7	29.5	11.8	ヨコナデ	ヘラケズリ	ヘラケズリ	ヨコナデ	ヘラナデ	ヘラケズリ	砂底	
3	須恵器	長径壺	〃	10.2	25.3	9.0	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ヘラナデ	

［遺構の時期］出土土器の型式、出土状況から縄文時代中期と考えられる。

⑾ 11号土坑（第17・28・29図、表15・20、写真２・８・９・14）

［位置］グリットⅦのほぼ中央部に位置する。

［形態］平面形は北西から南東方向に長軸をもつ楕円形を呈する。壁面は外反し、ほぼ垂直に立ち上がる。底面の南西側には本土坑と重複し、底面を掘り込む楕円形の土坑がみられる。

［規模］長軸約2.5m、短軸約1.9m、深さ約0.7mを測る。底面を切る土坑は長軸約1.4m、短軸約1.0m、深さ約1.1mを測る。

［覆土］２層に区分される。１層はローム混じりの暗褐色土層、２層は橙褐色粘土や、暗褐色土層の混合した粘土質ローム層である。なお、地山は粘土層である。

［出土遺物］土器の破片のみの出土であるが出土状況は下表のとおりである。

表15　第11号土坑出土遺物

土器・石器 ＼ 覆土	土器						石器	
	円筒下層式	円筒上層式	大木系	十腰内Ⅰ式	十腰内Ⅱ式	土師器	石鏃	
1　層		120	24	7	1	17	2	
2　層	1	32	16	3	1			

［遺構の時期］出土土器の型式から縄文時代中期と考えられる。

⑿ 12号土坑（第17・30・31・32・33図、表16・17・20、写真10・12・14）

［位置］グリットⅦ東側ほぼ中央に位置する。

［形態］平面形は東側に下底をもつ台形を呈す。壁面は東側は急傾斜で外傾して立ち上がるが、西側部分では緩やかに立ち上がる。底部にはかなり凹凸がみられる。北東部にピットが１個みられる。

［規模］下底辺が約1.8m、上底辺約1.1m、高さ約1.8m、深さ約0.26mを測る。

［覆土］２層に区分される。上位の１層はローム混じりの暗褐色土層、下位の２層は褐色粘土と黄褐色ロームの混合した粘土質ローム層である。

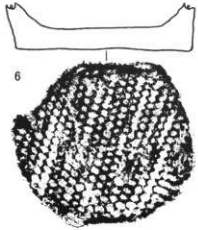
［出土遺物］土器の破片のみの出土であるが、出土状況は下表のとおりである。

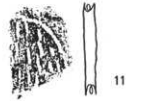
表16　第12号土坑出土遺物

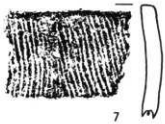
土器・石器 ＼ 覆土	土器					石器	
	円筒上層式	大木系	十腰内Ⅰ式	土師器	須恵器	スクレーパー	石錘
1　層	43	20	3	10	1		1
2　層	11	3				1	

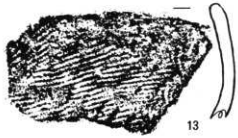
［遺構の時期］出土土器の型式から縄文時代中期と考えられる。

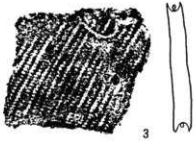
第27図　第10号土坑出土土器

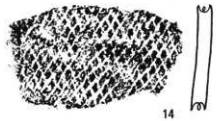


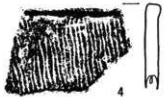




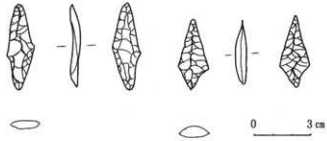








第28図　第11号土坑出土土器（1～14）



第29図　第11号土坑出土石器

(13) 13号土坑（第18･34図、表20、写真1･14）

［位置］Ⅸグリット北東隅に位置する。

［形態］平面形は開口部で東西及び南北方向に辺をもち、東側がやや膨らんだ不整な隅丸方形を呈す。底部においても開口部よりやや小さいが、隅丸方形を示す。

［規模］開口部では、辺の長さ約0.9m、深さ約1.6mを測る。底部での辺は約0.75mである。

［覆土］4層に区分される。上位から1層は褐色ローム混じりの暗褐色土層、2層は橙色粘土質ローム、3層はローム質粘土、4層は褐色凝灰質中砂である。

［出土遺物］覆土2層から円筒上層式土器片6片、大木系土器片1片が出土している。石器としては1層から石槍が1個出土している。

［時期］不明である。

(14) 14号土坑（第18･35図、表20、写真10･14）

［位置］Ⅸグリット南東隅に位置する。

［形態］平面形は南北に長軸をもつ長楕円形を呈す。壁面は緩やかに外傾して立ち上がる。底面も長楕円形を示す。

［規模］長軸は約1.5m、短軸約0.9m、深さ約0.56mを測る。

［覆土］2層に区分される。1層は褐色ローム混じりの暗褐色土層、2層は橙褐色粘土混合の褐色ローム層である。

［出土遺物］覆土1層から円筒上層式土器片5片、大木系土器片2片、十腰内Ⅰ式1片が出土している。石器は1層からスクレーパーが1個出土している。

［時期］出土土器形式から縄文時代中期から後期と考えられる。

(15) 15号土坑（第18図、写真2･10）

［位置］Ⅸグリット南西隅に位置する。

［形態］平面形はほぼ円形を呈す。壁面は急傾斜で外反して立ち上がる。底面は平坦で円形を示す。

［規模］平面形開口部で半径約0.45m、深さ約0.67m、底面の半径は0.22mを測る。

［覆土］2層に区分される。1層はローム混じりの暗褐色土、2層は橙褐色粘土、暗褐色土混じりの粘土質ローム層である。

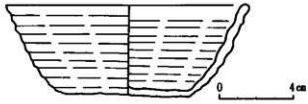
［出土遺物］出土土器は1層からの破片のみの出土である。円筒上層式土器5片、大木系2片、十腰内Ⅰ式1片、土師器2片である。

［時期］出土土器型式から縄文時代中期から後期と考えられる。

(16) 16号土坑（第18図、写真2･10）

［位置］Ⅸグリット南側中央部に位置する。

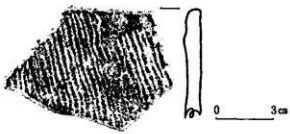
［形態］東西に長軸をもつ楕円形を呈す。壁面は2段の傾斜をもち、東西壁は緩傾斜で、また、南北壁は急傾斜で立ち上がる。底面は円形を示す。



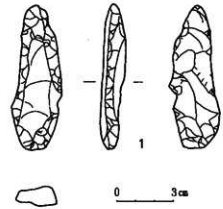
第30図　第12号土坑出土土器

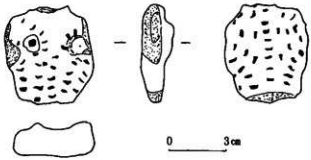
表17　第12号土坑出土土器観察表

遺物番号	種類	器種	出土位置	計測値			外面調整			内面調整			底面調整	備考
				口径	器高	底径	口縁部	体部上半	体部下半	口縁部	体部上半	体部下半		
1	土師器	坏	G7 12号土坑	13.0	5.1	6.3	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	回転糸切	

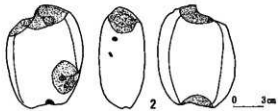


第31図　第12号土坑出土土器

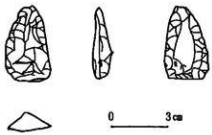




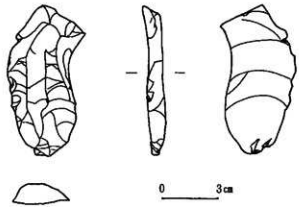
第32図　第12号土坑出土土偶



第33図　第12号土坑出土石器



第34図　第13号土坑出土石器



第35図　第14号土坑出土石器

[規模] 平面形開口部の長軸約0.8m、短軸約0.7m、底面の半径は約0.75m、深さ約0.4mを測る。

[覆土] 2層に区分される。1層はローム混じりの暗褐色土、2層は橙褐色土、暗褐色土混じりの粘土質ロームである。

[出土遺物] 検出されなかった。

[時期] 不明である。

3 石囲炉（第36・37図、写真2・10）

[位置] Ⅷグリット中央よりやや北東に位置する。

[形態] 地面を長方形に約10cm掘り、凹みの外縁に14個の自然石（最大40×8cm、最小17×5cm）をコの字形に配している。焚き口の方位は北である。

[規模] 長辺が約0.5m、短辺が約0.4m、深さ約0.1mである。

[覆土] 炉内は2層（暗褐色土層と赤褐色焼土層）に分層される。炉底は浅い凹みを呈し、炉内全面が焼土となっており、焼土の厚さは約6cmである。

[出土遺物] 上位の1層からは円筒上層式土器片21個、大木系土器片3個、十腰内Ⅰ式土器片2個が出土している。炉底からは円筒上層式土器片1個が出土した。

[遺構の時期] 出土土器の型式から縄文時代中期と考えられる。

4 埋設土器遺構（第36・38・39図、表18・19、写真11）

[位置] Ⅷグリット北側中央付近に位置する。

[形態] 遺構平面の開口部は北東から南西に長辺をもつ、長方形を呈する。土器は遺構の北西隅に直立した状態で埋設され、口縁部と胴下半部の大半と底部が欠損する。

[規模] 遺構の長辺1.3m、短辺1.2m、深さ（土器掘り下げ状態）0.74mを測る。埋設土器の口縁部での直径は28.5cm、底部での直径18.5cm、高さ17.8cmを測る。

[覆土] 帯紫褐色土の単一層である。

[出土遺物] 埋設土器1個体のほか、その上の覆土から下記のような土器片が出土している。

表18 埋設土器遺構出土土器

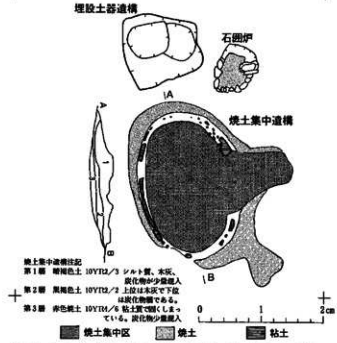
土 器	円筒下層式	円筒上層式	大木系	十腰内Ⅰ式	十腰内Ⅱ式	土師器
破片数	1	48	14	3	1	3

[遺構の時期] 埋設されていた土器は縄文時代後期前葉、十腰内Ⅰ式に比定されるものであり、当該時期に構築されたものと考えられる。

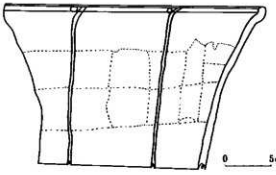
5 焼土集中遺構（第36・40・41図、表20・21、写真2・11・12・14）

[位置] Ⅷグリット中央よりやや南西に位置する。

[形態] 北西から南東に長軸をもつ楕円形を呈する。遺構は地面を楕円形に外縁から中央部に向けて凹地状に掘り込んでおり、その掘り込み凹地に沿って粘土を貼っている。外縁内部はやや厚く粘土で貼り



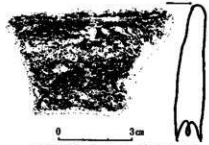
第36図　石囲炉、埋設土器遺構、焼土集中遺構



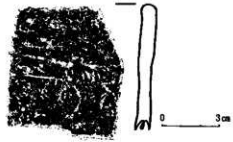
第38図　埋設土器遺構出土土器

表19　埋設土器遺構出土土器観察表

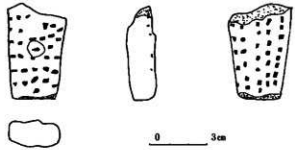
番号	出土位置	器形	部位	外面施文文様	備考
1	G8, II	深鉢(?)	完形	ボタン状文、隆帯、RL、沈線文	底面なし



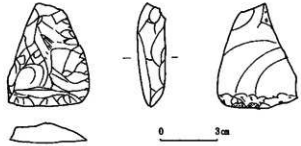
第37図　石囲炉出土土器



第39図　埋設土器遺構出土土器



第40図　焼土集中遺構出土土偶



第41図　焼土集中遺構出土石器

表20　土坑・遺構出土石器計測表

土坑遺構No.	図版番号	種別	形態最大測定値(cm) 径	幅	器厚	質量(g)	石質	グリット	層位	整理番号
1号	19	石錐	5.11	2.60	1.60	10.64	珪質頁岩	I	II	1114
1号	19	石斧	5.90	4.80	2.60	124.2	ホルンフェルス	I	II	1191
2号	20	スクレーパー	3.09	1.0	1.76	4.3	珪質頁岩	I	I	1128
4号	23	スクレーパー	7.48	5.64	1.72	5.0	〃	I	I	584
5号	24	石鏃未製品	2.84	4.0	0.5	4.0	〃	II	I	382
6号	25	蛇状石器	19.02	3.02	3.11	630.0	安山岩	II	II	1185
11号	29	石鏃	4.4	1.28	0.76	2.2	碧玉	VII	I	816
11号	29	石鏃	3.1	1.42	0.5	1.47	珪質頁岩	VII	I	1538
12号	33	スクレーパー	7.45	6.9	1.24	17.9	〃	VII	ピット	1625
12号	33	石錘	6.08	5.62	2.52	130.0	流紋岩	IX	I	1537
13号	34	石槍	3.7	2.29	1.3	7.1	珪質頁岩	IX	I	1473
14号	35	スクレーパー	7.74	2.89	1.16	30.7	〃	IX	I	1382
焼土集中	41	エンドスクレーパー	5.02	4.05	1.66	28.8	〃	VIII	I	573

固められている。壁面は粘土で急傾斜で外反して立ち上がる。焼土は主として掘り込みの楕円形遺構内に集中しているが、外周にも分布しており、とくに東側中央部には鐘状に突出して濃密に堆積している部分も認められる。

[規模] 遺構の長軸約2.4m、短軸約1.4m、底部の深さ約0.25mを測る。焼土範囲はこれより広く長軸約2.8m、短軸約2mの楕円状に分布し、東側中央の鐘状突出部分の面積は約0.8m×0.8mである。また、南東部の突出は約0.5m×0.5mである。

[覆土] 3層に区分される。上位の1層は焼土、木炭の混入した暗褐色土層、その下位の2層は木炭状炭化物の混入した黒褐色の木灰層、3層は赤褐色焼土である。

[出土遺物] 土器は破片のみの出土であるが、出土状況は下表のとおりである。

表21 焼土集中遺構出土遺物

土器・石器 / 覆土	土器						石器
	円筒下層式	円筒上層式	大木系	十腰内Ⅰ式	土師器	須恵器	エンドスクレーパー
1層	1	82	20	5	4	1	1
2層		8	2	3			
3層	(土器・石器、出土なし)						

[小結] 出土土器型式から縄文時代中期末から後期と考えられる。遺構の機能は不明であるが、堆積土状況等から土器の工房としての可能性も考えられる。

第2節 遺構外出土遺物

1 土器 (第42～45図、写真15～19)

遺構外から出土した土器は、リンゴダンボール箱相当7箱分ほどである。縄文時代前期ないし後期の土器から古代の土師器、須恵器まで多時期のものが出土したが円筒上層式土器、大木系土器が主体を占める。

縄文土器、土師器、須恵器の出土量を比較すると圧倒的に縄文土器が多く、約90%を占める。縄文土器の出土量が多いグリットはV、Ⅶ、Ⅷの3グリットで75%を占め中でも第11号、12号土坑のあるⅧグリットに集中(30.5%)する傾向が認められる。土師器、須恵器についてもⅦグリットが多い。

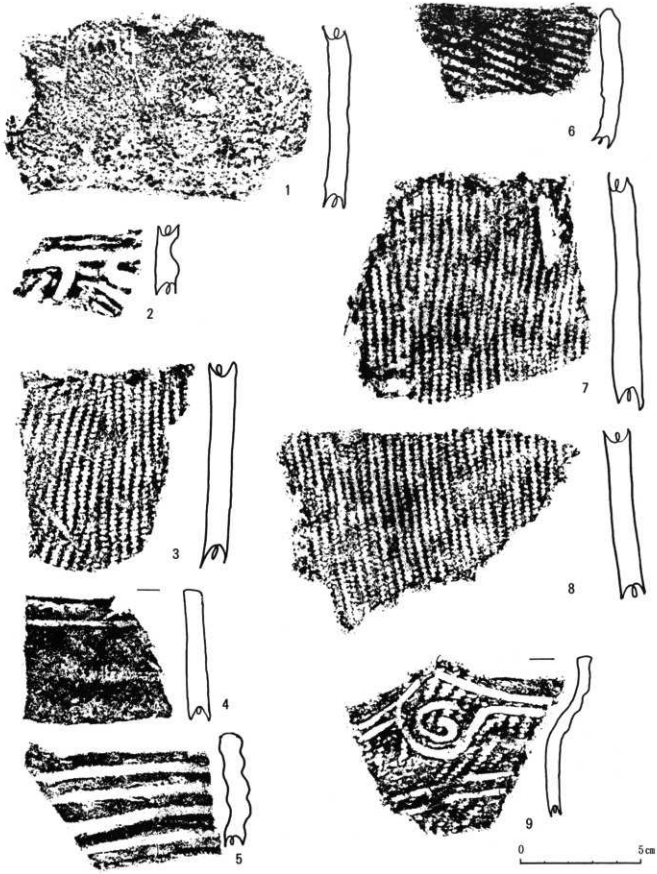
2 石器 (写真20)

遺構外から出土した土器の総数は13点で、その内訳はスクレーパー(2)、石鏃(4)、石槍(2)、石錐(1)石錘(1)、台石(2)、クボミ石(1)である。石器の出土グリットはⅧ(4)、Ⅶ(3)が多い。

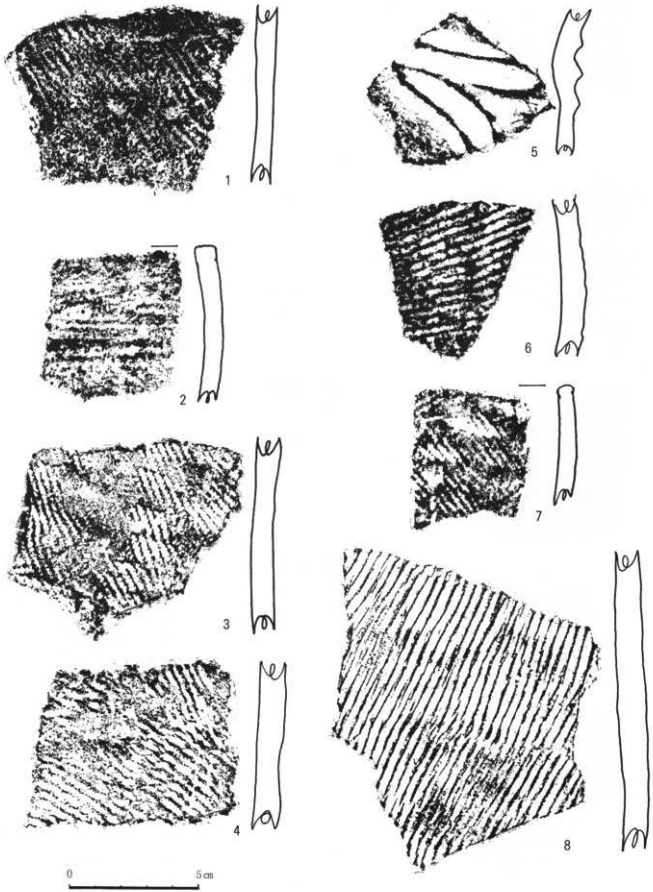
第3節 検出遺構と出土遺物のまとめ

1 検出遺構

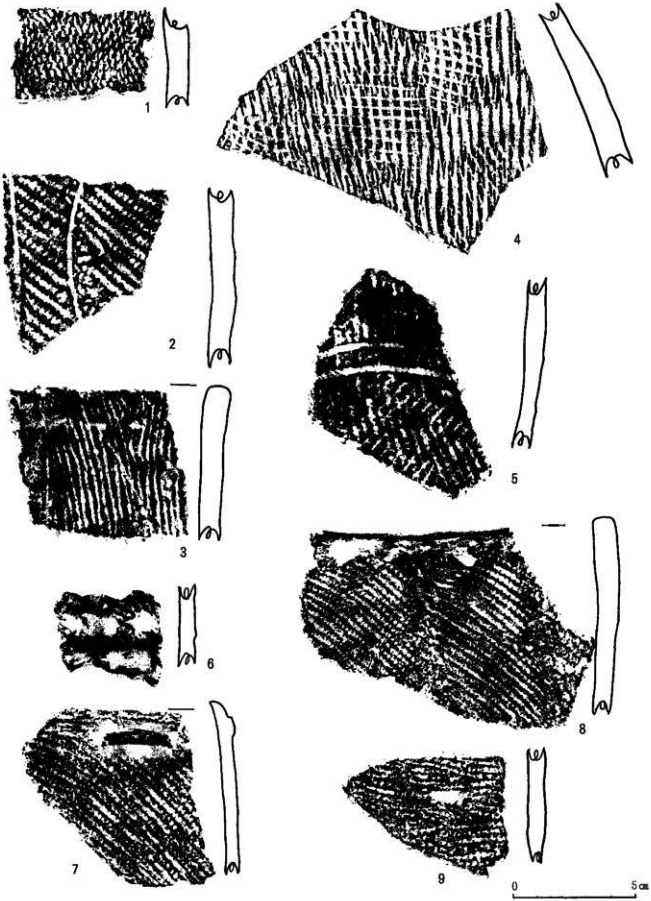
検出した遺構は竪穴住居跡3軒、土坑16基、石囲炉、埋設土器遺構、焼土集中遺構各1基である。



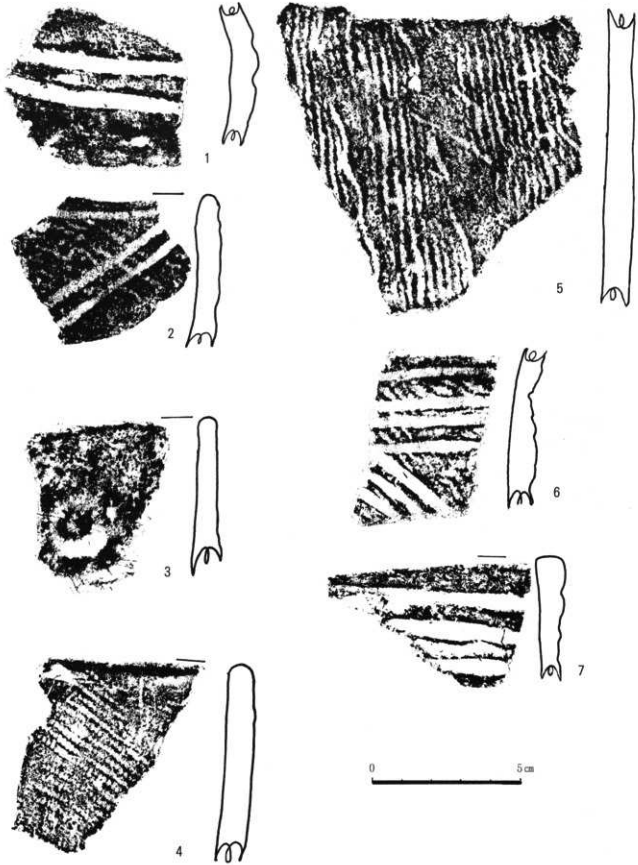
第42図　遺構外出土土器－1
1：GⅠ、2：GⅣ、3～5：GⅤ、6～9：GⅥ



第43図　遺構外出土土器－2
1：GⅥ、2～8：GⅦ



第44図　遺構外出土土器－3
1～5：GⅦ、6～9：GⅧ



第45図　遺構外出土土器－4
1～2：GⅧ、3～7：GⅨ

竪穴住居跡のうち、第1号と第2号竪穴住居跡は重複関係にあり、第2号住居跡は第1号住居跡を切っている。時期は1号住居跡は縄文時代前期、第2号住居跡は中期と考えられる。なお、第2号住居跡には内部に2重の周溝がみられる。第3号竪穴住居跡の規模は第1号と第2号住居跡に比べ、きわめて小さく、また、形態も第1号と第2号住居跡が楕円形を示すのに対し、隅丸方形を呈し違いを示す。

土坑16基の時期区分は、縄文時代の前期 1、中期 9、中期～後期 3、古代 1、不明 2で中期のものが多い。出土遺物では11号土坑が最も多く、12号、6号、4号も多い。これらの土坑では出土遺物も多時期にわたっている。

石囲炉は大小14個の自然石で構築されており、炉底からの出土土器から時期は縄文時代の中期と考えられる。規模はやや小型である。

埋設土器遺構に埋設されていた土器はやや大型で、底部はみられないものの胴部、口縁部とも遺存状態は良好である。埋設土器の時期は縄文時代後期と考えられる。遺構内からは炭化物、焼土等も認められず機能は不明である。

焼土集中遺構は楕円形を呈し、中央部へ向けて凹地状に掘り込んでいる。外縁もその内部は粘土で貼り固められ、多量の焼土、木灰の堆積がみられる。時期は出土遺物から縄文時代中期末から後期と考えられる。遺構の機能は不明であるが、土器の工房の可能性も考えられる。

2 出土遺物

(1) 土器・土製品

ダンボール箱相当、10箱分の出土である。縄文時代前期～後期と古代の土師器、須恵器の土器であるが縄文時代中期の円筒上層式土器が主体である。これらを分類すると下表のとおりである。

表22 原子溜池(5)遺跡出土土器分類表

時代		型式別		備考
古代		・須恵系土師器 (第十五群) ・内黒土師器 (第十四群) ・須恵器 (第十二群) ・土師器 (第十二群)		・三段技法
縄文時代	後期	・十腰内Ⅱ式土器 (第十一群) ・十腰内Ⅰ式土器 (第十群)		・刺突文 ・平行沈線文
	中期	・円筒上層d_1式土器 (第八群) ・円筒上層d_1式土器 (第七群) ・〃 c 〃 (第六群) ・〃 b 〃 (第五群) ・〃 a 〃 (第四群)	・大木系土器 (第九群)	・廻旋文 ・撚糸文 ・粘土紐(偽文なし) ・爪形文 (隆起線文・斜行縄文)
	前期	・円筒下層d_1式土器 (第三群) ・円筒下層b式土器 (第二群) ・円筒下層a式土器 (第一群)		・すだれ状文 ・複節縄文(右、左)

土製品として土偶(3)、ペンダント(1)、石錘状土製品(1)が出土している。

(2) 石器、石製品等

スクレーパー(10)、エンドスクレーパー(1)、石鏃(5)、石槍(6)、鉈状石器、石錐(2)、石斧(5)、石鉇(2)、石鏃未製品、半円状扁平打製石器、クボミ石、石皿、台石(2)、石核、朱原料が出土している。

これらの中で特徴的なことをあげると、擦切手法(石斧1)、細部加工(スクレーパー2、石鏃1)、フレーク活用(スクレーパー6、石錐1)などである。また鉈状石器には刃がついているのも特徴である。

第5章 ま と め

原子溜池(4)遺跡の調査は、原子溜池と山道溜池に面する舌状台地(高位段丘面)南西部の一部に限定されており、台地面(高位段丘面)には遺構と思われる落ち込みが各所にみられたものの調査区域外であるため、台地全体を把握するには至らなかった。検出した遺構は竪穴状遺構1基のみであったが、ロクロピットと思われる土坑のあるカマド、煙道付きの遺構で焼物の工房跡の性格をもつものと考えられることから、今後の調査が期待される。出土土器は縄文土器、土師器、須恵器であるが、縄文土器と須恵器は合わせて20%程度と少なく、大部分は土師器で占められる。しかし、固体数は少ない。本遺跡の営まれた時期は遺構および出土土器から平安時代と考えられる。

原子溜池(5)遺跡の調査は、原子溜池(5)遺跡のうちの南東部、原子溜池の西岸を占める台地(中位段丘面)の限られた一部分であった。

検出した遺構はは竪穴住居跡3軒、土坑16基、石囲炉、埋設土器遺構、焼土集中遺構各1基で、狭い調査範囲に比して遺構は多かった。

出土土器の時期は、縄文時代前期～後期と平安時代である。これらの中では、縄文時代中期の円筒上層c・d式土器の固体数が多く、出土土器の大部分を占める。

本遺跡は縄文時代の前期、中期、後期と平安時代にわたる遺跡である。ただし、遺構の形状および出土土器から、本遺跡の営まれたおもな時期は縄文時代中期と考えられ、隣接する原子溜池(2)、(3)、(4)遺跡、山道溜池遺跡と平行する時期と考えられる。

【引用・参考文献】

鈴　木　義　昌	1965	日本の考古学　縄文時代　河出書房新社
江　坂　輝　弥ほか	1970	「石神遺跡」ニュー・サイエンス社
村　越　　潔	1974	「円筒土器文化」雄山閣
北奥古代文化研究会	1976	北奥古代文化 第8号
三　宅　徹　也	1978	「円筒土器の概念とその崩壊」
青森県農林部	1982	「土地分類基本調査　青森西部」
青森県農林部	1986	「土地分類基本調査　五所川原」
森田村教育委員会	1997	「石神遺跡」

写真１　原子溜池(4)・(5)遺跡検出遺構

原子溜池(4)遺跡　１号竪穴状遺構中の土坑

原子溜池(4)遺跡　１号竪穴状遺構中の煙道・かまど跡

原子溜池(4)遺跡　Ⅷ・Ⅸグリット

以下は原子溜池(5)遺跡の写真　原子溜池(5)遺跡南半部のグリット

第１号、第２号竪穴住居跡　第２号住居跡は第１号住居跡を切っている

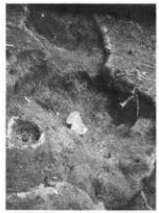
第２号竪穴住居跡　二重周溝

第２号竪穴住居跡　柱穴中の土器

第３号竪穴住居跡

写真２　原子溜池(5)遺跡検出遺構

第１号土坑



第２号土坑(上)と第３号土坑(下)

第11号土坑

第13号土坑

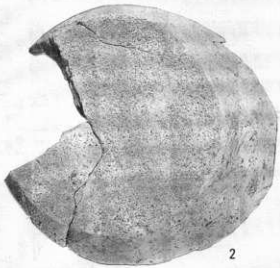
第15号土坑(左)と第16号土坑(右)

石　囲　炉

焼土集中遺構

焼土集中遺構

1



2

3

4

1 遺構内出土遺物　　S=3/5

2 遺構外出土遺物　　S=1/3

写真3　原子溜池(4)遺跡出土遺物

－遺構内出土土器－

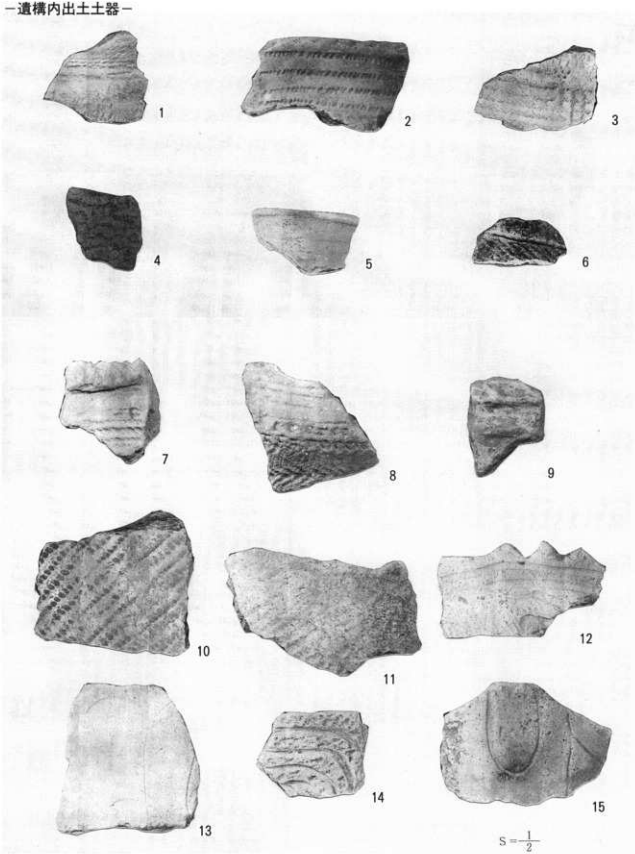


写真４　原子溜池(5)遺跡出土遺物 (1)
1～6：1号住居跡、7～15：2号住居跡、1：縄文前期、2～4、7～15：縄文中期、5～6：縄文後期

－遺構内出土土器－

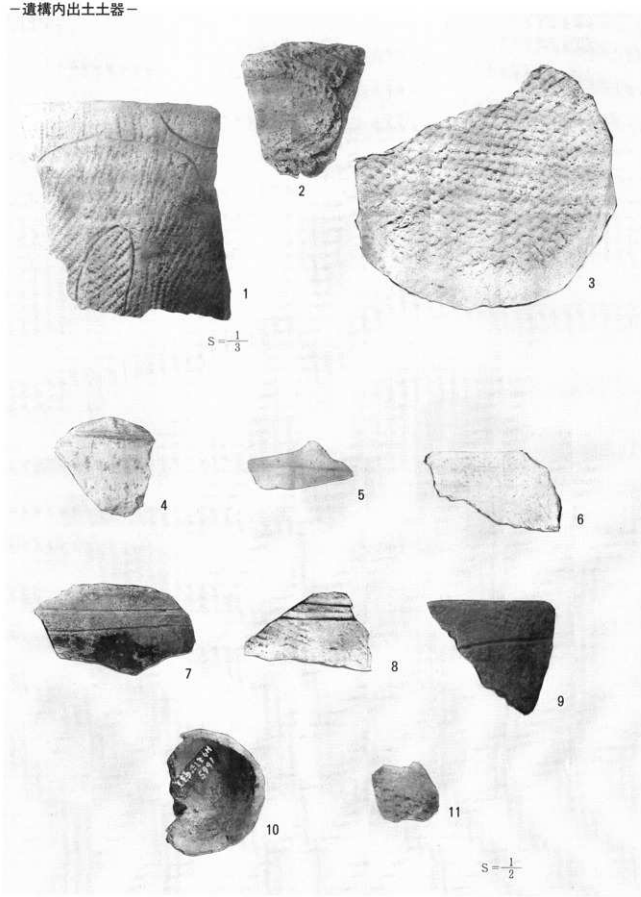
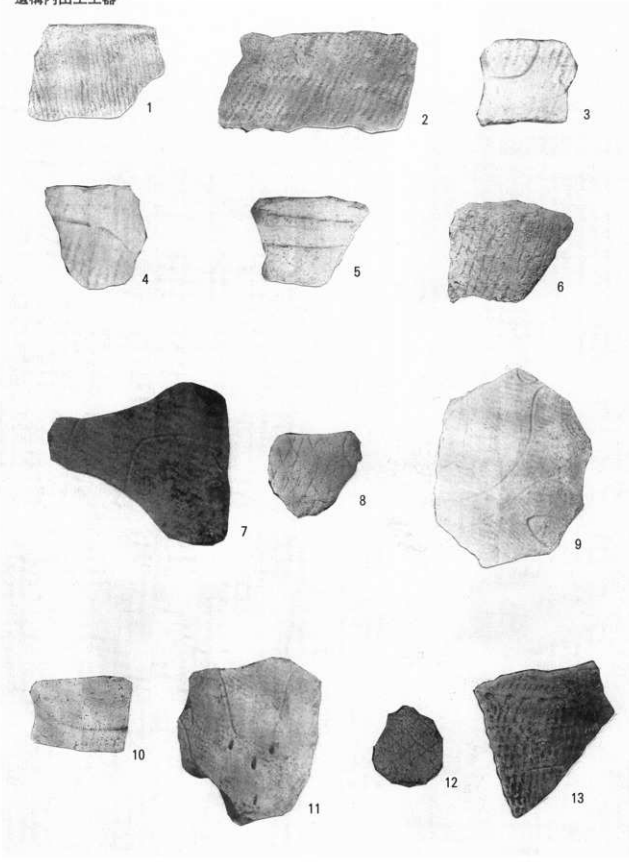


写真５　原子溜池(5)遺跡出土遺物（2）
1～11：２号住居跡、１～３：縄文中期、４～11：縄文後期

－遺構内出土土器－



S＝$\frac{1}{2}$

写真６　原子溜池(5)遺跡出土遺物（3）

1～3：3号住居跡、4～6：1号土坑、7～8：2号土坑、9～12：4号土坑
13：5号土坑、13：縄文前期、1～5・7・9～11：縄文中期、6・8・12：縄文後期

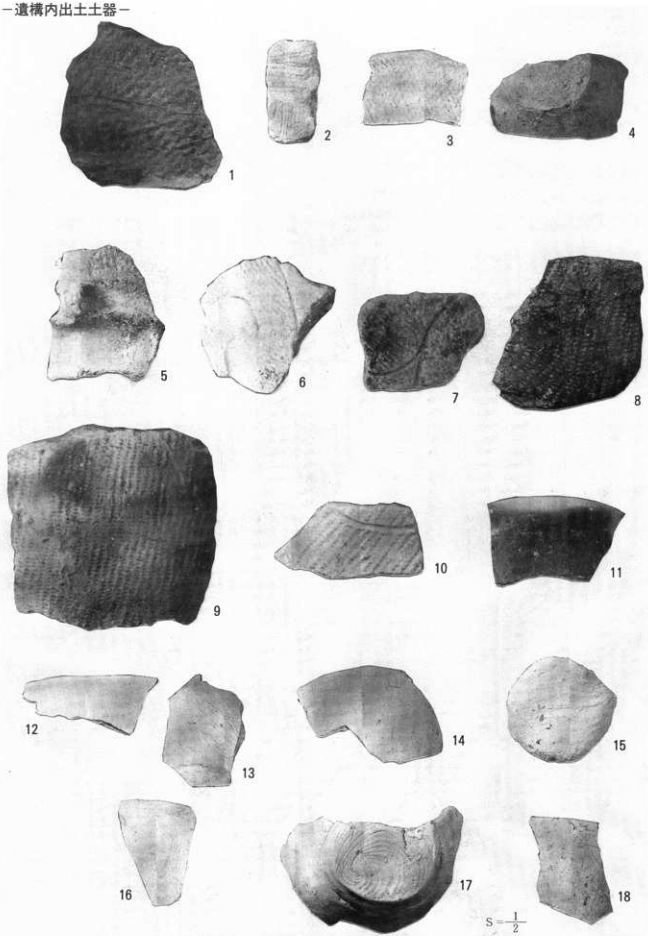


写真７　原子溜池(5)遺跡出土遺物（4）

1～4：5号土坑、5～18：6号土坑、1～2：縄文前期、3・5～11：縄文中期、4・12～18：土師器

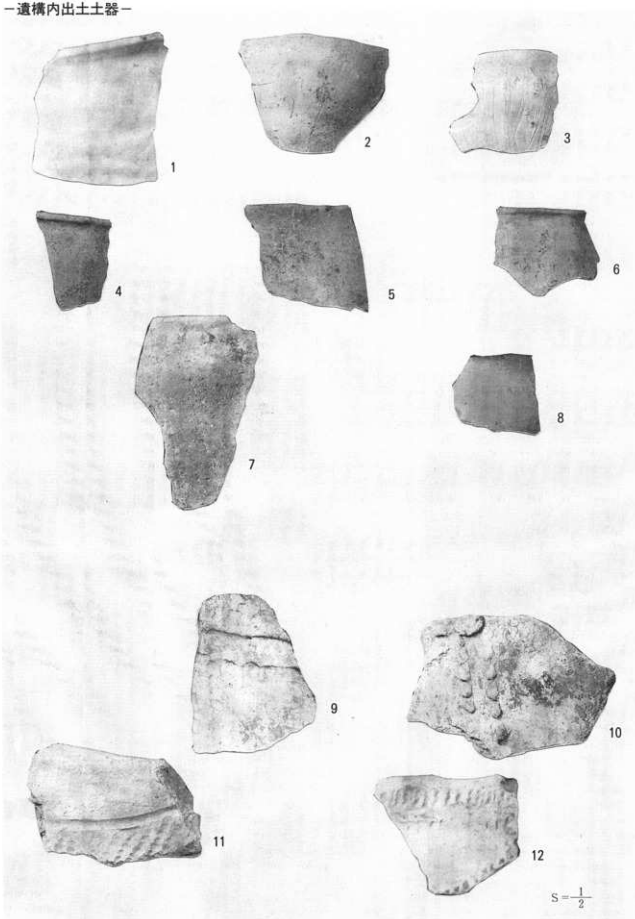
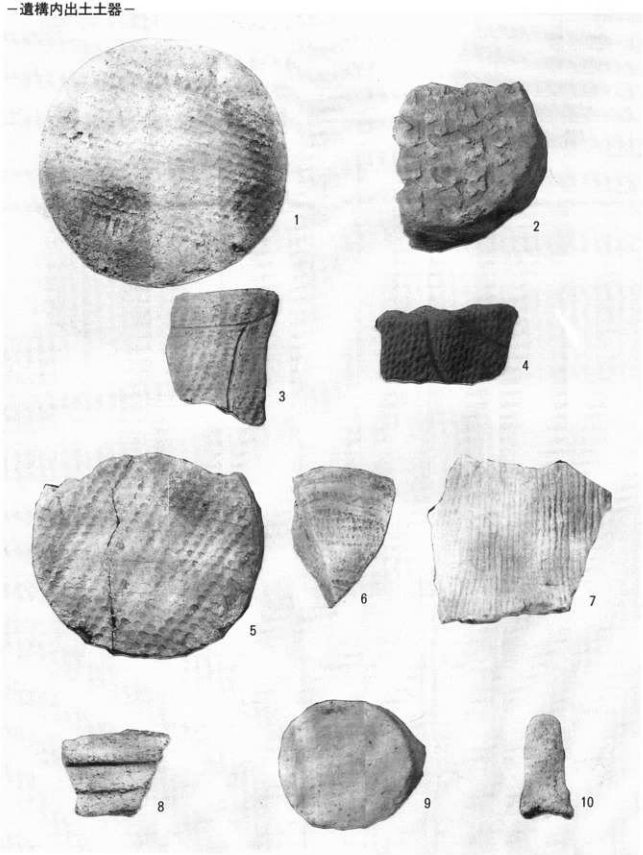


写真８　原子溜池(5)遺跡出土遺物 (5)

1～7：6号土坑、8：10号土坑、9～12：11号土坑、9～12：縄文中期、1～8：土師器

－遺構内出土土器－



S＝$\frac{1}{2}$

写真９　原子溜池(5)遺跡出土遺物（6）
1～10：11号土坑、1～7：縄文中期、8：縄文後期、9～10：土師器

－遺構内出土土器－

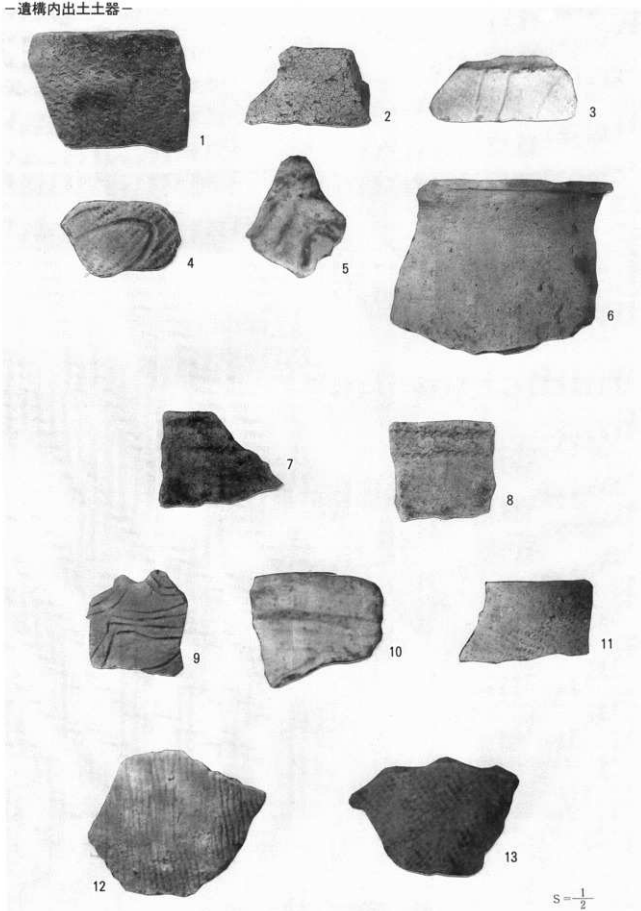
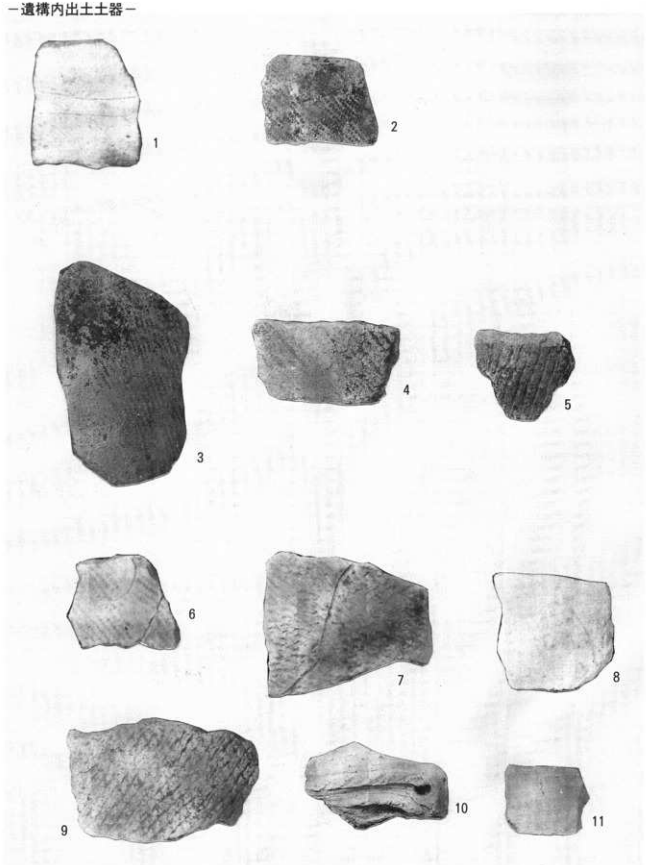


写真10　原子溜池(5)遺跡出土遺物(7)

1～6：12号土坑、7～8：14号土坑、9～10：15号土坑、11：16号土坑、12～13：石囲炉
1～5・7～9・11～13：縄文中期、10：縄文後期、6：土師器

－遺構内出土土器－



S＝$\frac{1}{2}$

写真11　原子溜池(5)遺跡出土遺物（8）

1：埋設土器遺構、2～11：焼土集中遺構、2～8：縄文中期、1・9～11：縄文後期

－遺構内出土土製品－

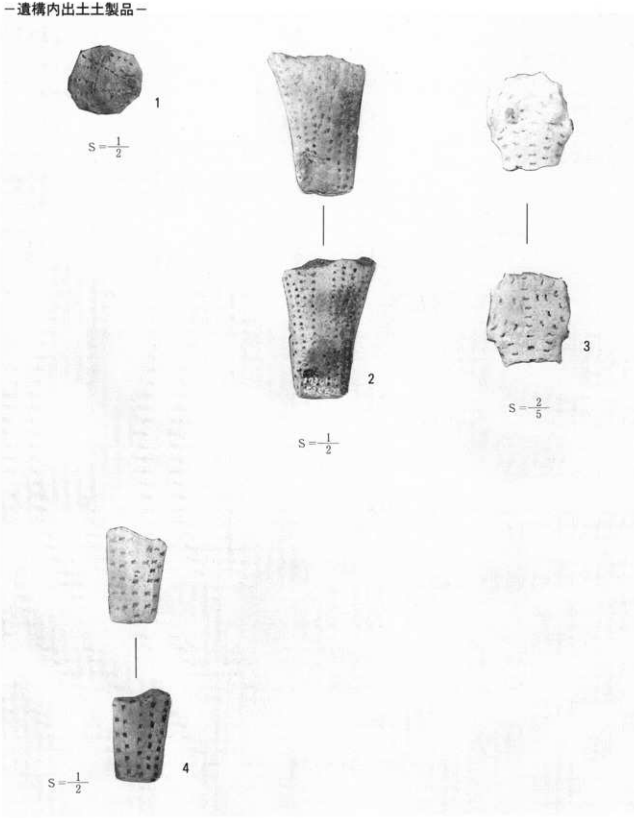


写真12　原子溜池(5)遺跡出土遺物 (9)

1：4号土坑、2：6号土坑、3：12号土坑、4：焼土集中遺構、1：ペンダント、2～4：土偶

－遺構内出土石器－

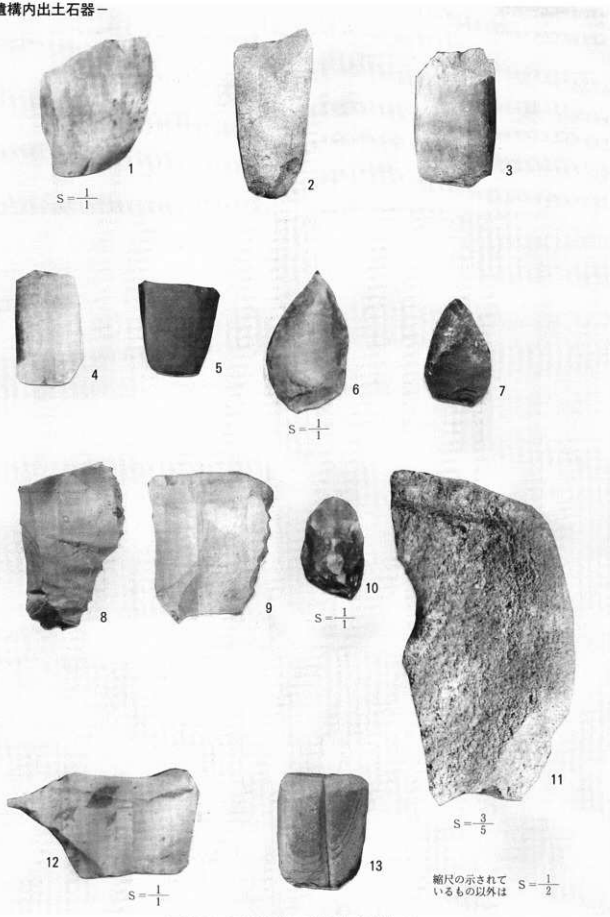


写真13　原子溜池(5)遺跡出土遺物 (10)

1～3：1号住居跡、4～11：2号住居跡、12～13：1号土坑、1・8～10：スクレーパー
2～5・13：石斧、6～7：石槍、12：石錐、11：石皿

－遺構内出土石器－

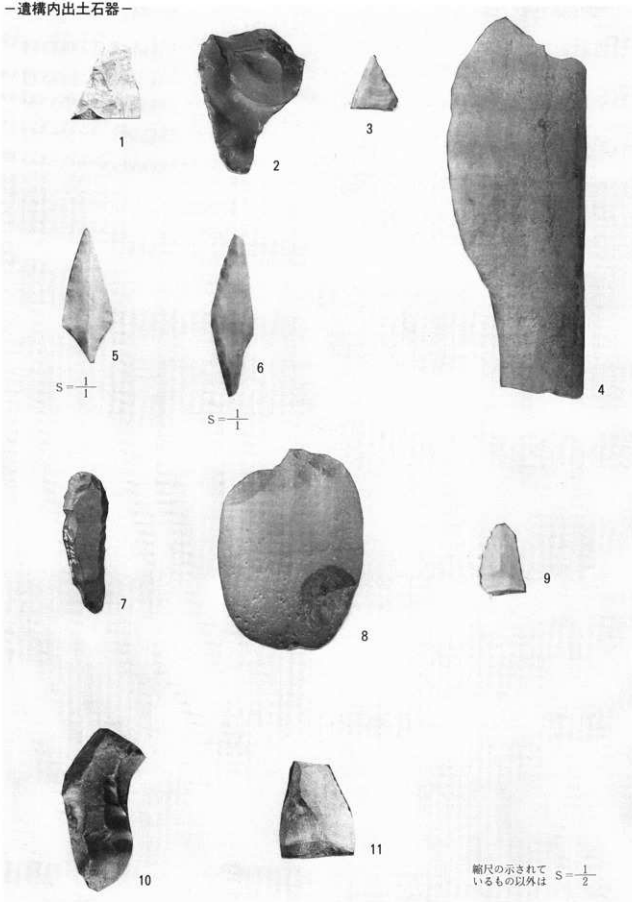


写真14　原子溜池 (5) 遺跡出土遺物 (11)

1：2号土坑、2：4号土坑、3：5号土坑、4：6号土坑、5～6：11号土坑、7～8：12号土坑
9：13号土坑、10：14号土坑、11：焼土集中遺構、1～2・7・10：スクレーパー
11：エンドスクレーパー、5～6：石鏃、8：石錘、9：石槍、4：鉈状石器、3：石鏃未製品

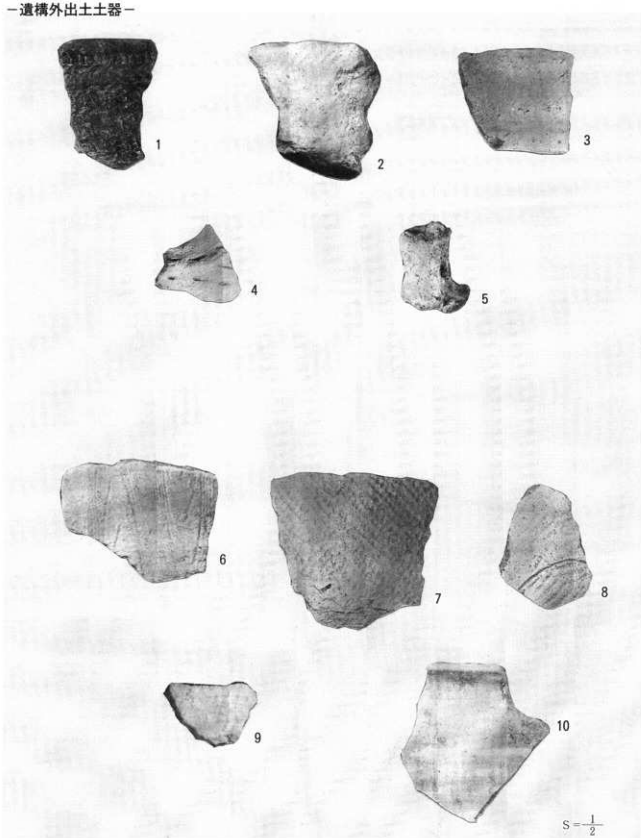


写真15　原子溜池(5)遺跡出土遺物(12)

1～5：GⅠ、6～10：GⅡ、1～4・6～8：縄文中期、5・9：縄文後期、10：土師器

－遺構外出土土器－

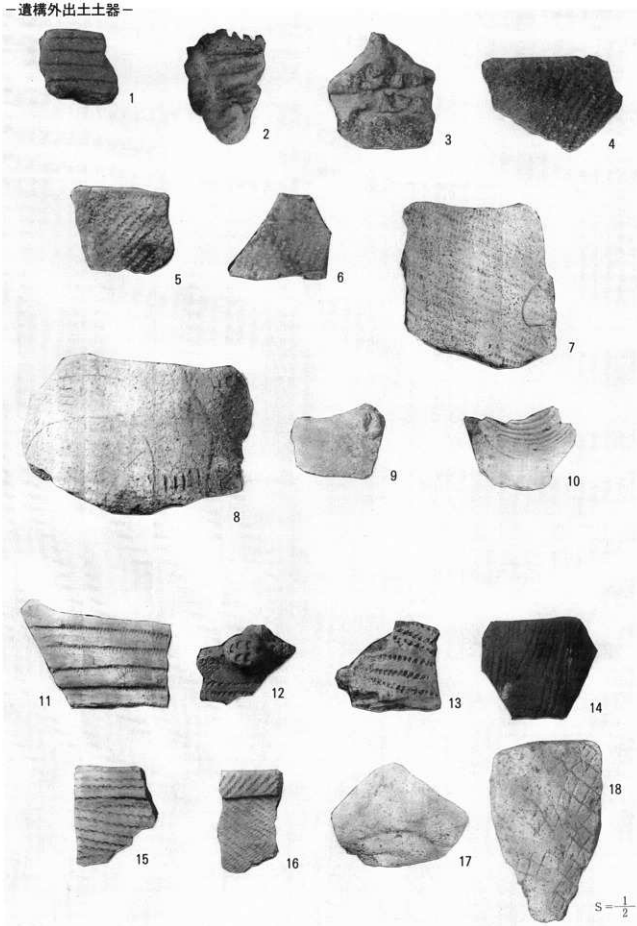


写真16　原子溜池(5)遺跡出土遺物 (13)

1～10：GⅣ、11～18：GⅤ、1～8・11～16：縄文中期、9・17～18：縄文後期、10：土師器

－遺構外出土土器－

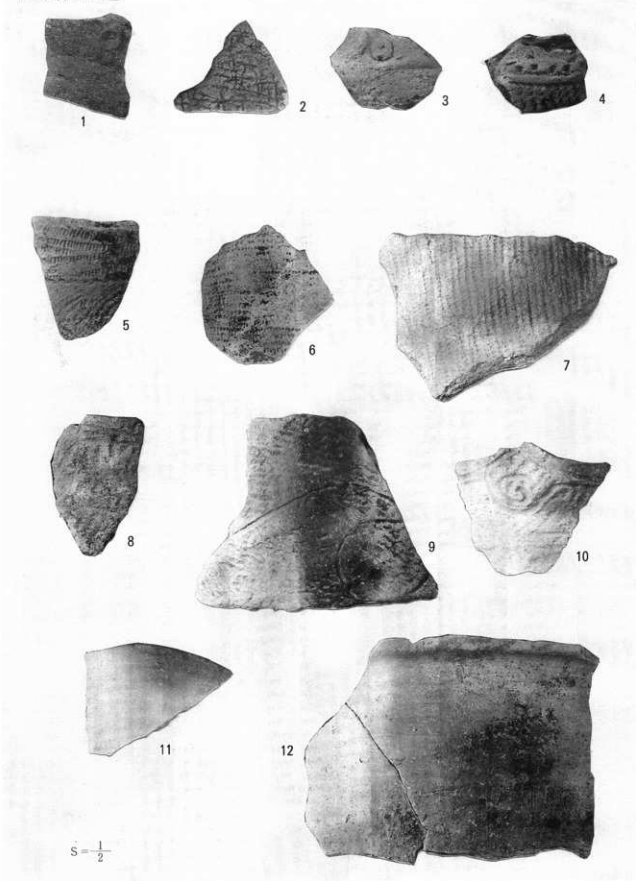


写真17　原子溜池(5)遺跡出土遺物 (14)

1～4：GⅤ、5～12：GⅥ、5～9：縄文中期、1～4・10～11：縄文後期、12：土師器

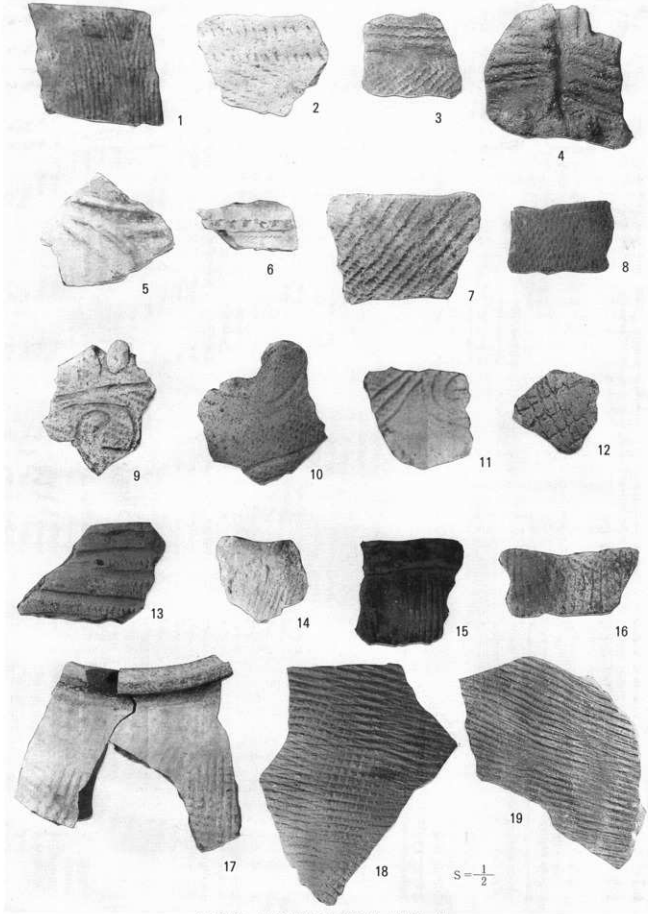


写真18　原子溜池(5)遺跡出土遺物 (15)

1～19：GⅦ、1～11：縄文中期、12～16：縄文後期、17～19：須恵器

－遺構外出土土器－

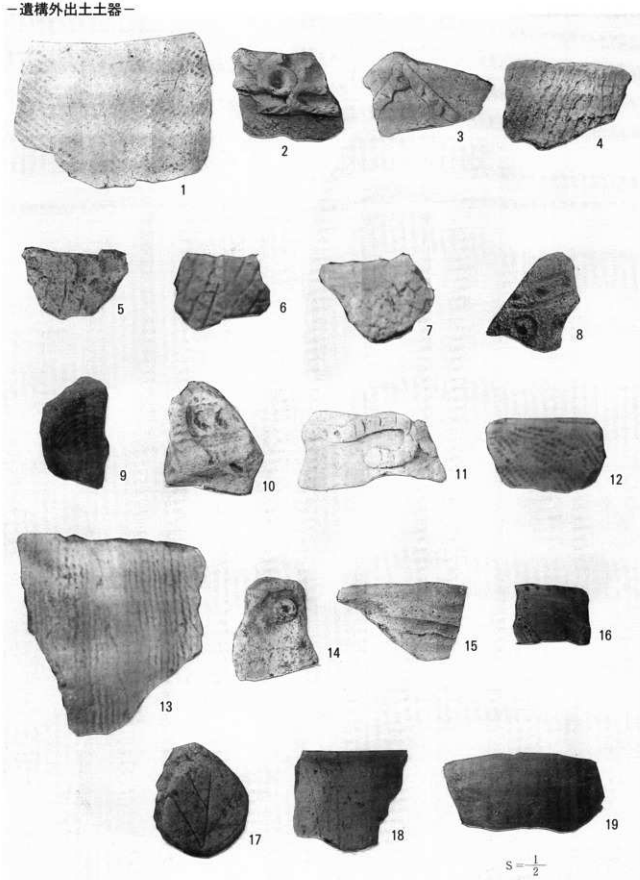


写真19　原子溜池(5)遺跡出土遺物 (16)

1～9：GⅧ、10～19：GⅨ、1～5・10～13：縄文中期、6～8・14～16：縄文後期、9・17～19：土師器

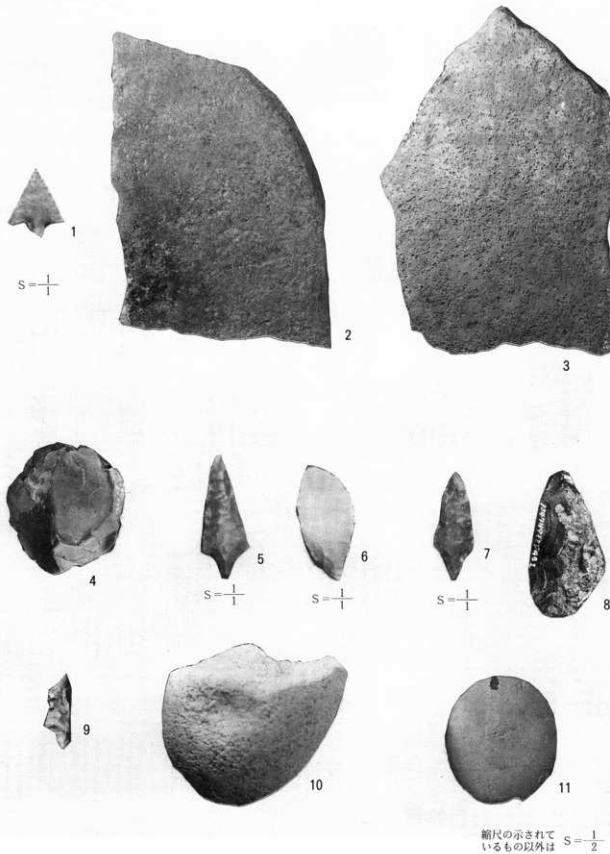


写真20　原子溜池(5)遺跡出土遺物 (17)

1～2：GⅣ、3：GⅤ、4：GⅥ、5～6：GⅦ、7～10：GⅧ、11：GⅨ、1・5・7：石鏃
4：スクレーパー、6・8：石槍、9：石錐、2～3：台石、10：クボミ石、11：石錘

発掘調査報告書 抄録

ふりがな	はらこためいけ4いせき　はらこためいけ5いせき
書名	原子溜池(4)遺跡・原子溜池(5)遺跡
副書名	特別高圧送電線新五所川原線新設工事に伴う遺跡発掘調査報告
巻次	
シリーズ名	五所川原市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第20集
編著者名	新谷雄蔵
編集機関	五所川原市教育委員会
所在地	〒037-8686 五所川原市字岩木町12　TEL 0173-35-2111
発行年月日	西暦1997年3月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
原子溜池(4)遺跡	青森県五所川原市大字原子字山元284-10外	02205	05039	40°46′17″	140°32′8″	19970430～19970626	196	送電線新設工事に伴う遺跡発掘調査
原子溜池(5)遺跡	青森県五所川原市大字原子字紅葉96外	02205	05040	40°46′15″	140°31′55″		225	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項
原子溜池(4)遺跡		歴史時代	竪穴状遺構	1基	土師器	
			土坑	1基		
			ピット	5基		
原子溜池(5)遺跡	集落跡	縄文時代前期～後期	竪穴住居跡	3軒	円筒下層式土器	
			土坑	16基	円筒上層式土器	
			石囲炉	1基	大木系土器	
			埋設土器遺構	1基	石器	
			焼土集中遺構	1基	土偶	
			ピット	数基		
		歴史時代	土坑	2基	土師器	
			ピット	2基	須恵器	

五所川原市埋蔵文化財調査報告書 第20集

原子溜池(4)遺跡・原子溜池(5)遺跡

発行日　1998年3月31日

発　行　五所川原市教育委員会
〒037-8686 青森県五所川原市字岩木町12
TEL 0173-35-2111

印刷／㈱西北印刷